
最強の武人に祝福を

粉犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の武人に祝福を

【Nコード】

N5960R

【作者名】

粉犬

【あらすじ】

原作のあらすじ位しか知らない漫画の世界に放り込まれた世界。そんな中神にもらったものは武術の才能・・・だけ！？
そんな才能で大丈夫か？
そんな感じで進んでいく、ギャグ？戦闘？・・・わからないなWW
オリジナルストーリー！よろしく願います。

最強は発狂す（前書き）

カオス、この一言です。

駄目な方はお逃げください。

初投稿ですのでそのところも多めに見ていただいて駄目出し感想
ジャンジャンください。

最強は発狂す

俺は起きたら・・・

「オメエは俺がミスって殺しちゃったからヨオ。何か願い事言ってみろ。」

五つまで叶えてやつからYO。」

・・・なんかDJ見たいな人キター

「あゝ、よくある転生ってことですか？」

「ん？そうだけど、つつゝか飽きたわこれ。」

そういつてサングラスと首にかけていたヘッドホンをとった。

「次は何しようかな・・・ジグソーパズルでも作るか？」

おっと、いつけね。転生先は「ネギま」OK？」

ネギま・・・あゝ、友達がなんか話してたな。

大体の流れは知ってるけど・・・

思い出せば原作介入は防げるかな

へ？何で原作介入しないかって、そんな死ぬじゃん？

「おう！大丈夫だ！！」

「おう、そうか！（いやあゝ、長い事この管理してるけどこんな
にやる気に溢れてるのは久しぶりだな。原作ズッタズッタの予感が

すんぜ！面白そうだから良いけど）
で、願い事は？」

「武術の才能を極限まで上げていただきたい。
それと鍛える事のできる環境。

あと、残した家族の安息。

残り二つは・・・別に良いです。」

原作介入はしたくないがまあ保険としてはこれが上々だろう。

「・・・へ？そ、そんなモンで良いのか！？ここで絶対の力を手
に入れておけば嫌な奴とか敵とかをボッコボコに出来たりもすんだ
ぞ！いや、一般人だったらそれだけでも十分かもしれないねえけどよう
！ほら、いろいろあんだらう？伝説の武器とか他の世界の魔法とか

「良いんですよ。自分に見合った力が有る。それが一番でしょう？
武器にしたって同じこと。傷つける物は選ばないが持つものを選ぶ。
同じ物を持っていても、所詮は仮初。」

そうそう、よく言うじゃん？過ぎたる力は身を滅ぼすって。
あんまりでかい力持ってたら絶対に目を付けられるし。

「・・・俺みたいなのよりお前のほうがよっぽど神様とかに向い
てるな。

わかった。逆境からのスタートって訳だよな？お前、男・・・いや、
漢だぜ！！

頑張つて来い！残り二つの願いはとっておいてやる。困った時に使
えるようにな！！」

あれ？なんかスнгеエ感極まってるんですが……
ま、良いか。

「最後に、俺の名前はシン。お前の名前は？」

「イチジョウウ シラヌイ 一条 不知火です。」

そこから視界が暗転し

「オギャアアアアアアアアアアア！！！！（転生ってここからかああああ
ああああ！！！！）」

・
・
・
・

「そんなこともありました。」

「何言ってるん？」

「ん、いや、なんでもないよ」

さて、「ネギま」の世界に生れ落ちたのは良い。

それにしても、「ネギま」……「子供先生ネギま！」だっけ？
なんか違う気もするな？

流れだけでどんな技があるとか知らんからなあ……

「・・・って事があつてな？・・・聞いとるん？」

「ああ、聞いてるよ。」

この話している女の子は『桜咲 刹那』・・・原作キャラじゃないことを祈る。

どこで知り合ったか、それは俺が生まれた家系の事を話すことになる。

剣上院家

家訓に生涯無敗を掲げ身内以外に負ける事を許さないという無茶振り全快の流派だ。

それもあつて親父や母親、祖父に当たるまでみーんな強い。もうやばい、化物、いやバケモノだよあんなモン。

そして『京都神鳴流』、剣上院に並んで強者が集まる流派・・・まあ良くは知らないが

その合同練習とやらで知り合ったのでたまに話している。

年は・・・確か2歳ほど下だったような気がする。俺が9歳、いや明日で10歳か。

だから7歳だったと思う。

始めてあつた時はなんかすごく必死に稽古してたけど・・・まあ理由なんて人それぞれだが。確か・・・友達に迷惑かけたから罪滅ぼしみたいな感じだったような気がするが

「で、その難しい技の習得が出来ない・・・と？」

「うん」

「で、いつものごとくその技の詳細は秘密」

「うん」

「はあ、そう言われてもなあ。集中力とか？」

「・・・集中力ってどうやったらあげられるん？」

「集中力の上げ方・・・座禅？瞑想？悪いがありきたりな物しか思いつかないな。」

なんかあからさまにガツカリしてるな。

仕方ないじゃないか、そんなアバウトな説明されて

「はい、そうですか。じゃあこんな感じでやれば良いんじゃないですか」

なんて答えられるか？普通

聞こうとすると秘匿がどうやら言って何もいわねえし。

「ま、頑張つて練習してれば出来るさ。じゃ、また明日。誕生会でな・・・っーか俺としてはこんなもんやんなくて良いんだけどな？」

「そ、そんなんだめ!!」

「む？なんでそんな怒んだよ・・・」

「だって、折角師匠とか本家守護三人衆の人たちにも相談してプレゼントを・・・ゴニョゴニョ」

「ん？何だつて？」

「なんでもない／＼／＼／修行あるから帰る！／＼／＼／／」

「なに怒ってんだ？あんな顔真つ赤にするほど怒らせることは言っていないと思うんだが・・・俺も帰るか。」

その翌日・・・

「おはよーっす。」

「「「「「おはようございますっ！」「」「」「」

・・・ひゃく、熱いねえ熱血だねえ？

俺にゃあ理解できんな！うむ。

そんなことを考えていると親父が話しかけてきた。

「おう！起きたか不知火！！いつも通り五段抜きしたら俺ん所に来いよっ？」

ん？なんか話でもあんのか？

・・・まあ良いか。

はてさて、この百段抜きと言う実にめんどくさいものになっております。

冒頭文でも話した通り。この剣上院の家訓は『生涯無敗』とか馬鹿な事言ってくれやがってるんですよ。チツ！迷惑したらねえよ。どこの人間シリーズ・・・失礼。

まあ、そんな感じなのですが。当然そんなもん掲げてたら道場破り

は日常茶飯事。

と言う事で段階分けがされています。

一段、門下生15人

二段、中位門下生10人

三段、上位門下生5人

四段、師範代1人

五段、師範1人　ここまでがノルマ

と、まあこんな感じでレベルみたいに難易度が高くなるわけですよ。これを五段抜きとっております。

ここまでは普通な感じでしょう。十分以上ですが・・・が、しかし！こんなもんじゃ終わらない。

そう、これはあくまで『分家五段抜き』

五段抜いた後に本家があるのです。

六段、本家門下生

七段、本家中位門下生

八段、本家上位門下生

九段、本家師範

十段、分家次期頭目及び頭目代行

それから地獄の・・・

十一段、分家頭目

十二段、本家守護三人衆　よくお菓子くれる。　これ超重要！

十三段、本家直属師範　これの中に母さんと祖母ちゃん

十四段、本家先代頭目　俺の祖父ちゃん

十五段、本家現頭目　俺の親父

・・・もう、ねえ？なにこれって話ですよ。

本家やら分家やらしらなえけどさあ。皆で仲良くやってりゃいいじゃない？

まあ、そんな願いもかなわず権力争いとかに巻き込まれるのですが・・・

で、俺が行ったことが在るのは九段まで

代償は全治5ヶ月チヨイの結構な怪我を負った・・・ハア

なんか六段越えたあたりから異常に力が強くなったり、瞬間移動みたいな速さで出てきたり、体が硬くなったり、触つてねえのに吹き飛ばされたりと中々化け物じみてる。

あの体からにじみ出ているものはなんなんだろう？

いや、良いんだよ？力強くなるっつっても俺よりちよっと強いくらいだし？

瞬間移動見たいのもできなくもないし・・・
体硬くすんだって筋肉でできる。

触ってなくても拳圧とかできなくもない！

だがしかし・・・

「まったく、やっぱり親父さんの子供だよなあ……」

袴を着て不知火の試合を観戦している。

一人は20歳位の若い青年で、もう一人は35歳くらいのオジサン。もう一人は杖をついているようなおじいさんだ。

「この間、坊ちゃんが体重計で計ったんの覗いたんやけどなあ……さっきのが有り得そうで困る重さやった。それとそんな時撮った写真が女性門下生に一枚2万で売れた。」

「「まじでか!?!」」

オジサンの言葉にお爺さんと青年が答える。

「まあ、これで安泰やお剣上院家は。」

「とつつあん、そりゃ解んないやろ? 跡継ぎやら何やらの問題が……」

「あれ? 金さん所こなかつたんつすか? あの神鳴流の譲ちゃん。」

「おお、あの譲ちゃんは良い目をしとつた、ええ娘さんじゃ。」

「……青山のボンのとこの譲ちゃんやったかのお?」

「いや、近衛さんのお嬢さんのお友達らしいつすよ?」

「あの譲ちゃんねえ。親父さんも気に入ってるようだが……育ちに批判するところが多いやろなあ。」

「なに、ここは実力がすべてや、そんなつまらん事ぬかすんやつたらワシが叩くからのお」

ふおっふおっふお、と高らかに笑っている。

「とっつあん、そいつは流石に横暴つてもんだ。」

「まあ、若にその気があるかどうかっすよねえ？」

そう言っつて少し三人が考え始める。

「桜咲の譲ちゃんは何の写真を見せたら真っ赤に湯であがっつるほどやから、

嫌い言うことは無いやろなあ……」

「なにやっつてんっすか……」

「ボンは……今は興味ないやろなあ。そんなことより興味があることがあるじやろ。」

「そういえばお二人はなんて答えたんっすか？今日の誕生日に渡すもの桜咲嬢に相談されて。」

「ハッピーーン」

「いやいや、それ金さんと松のオヤッサンがいつも若に上げてるやつすよね？」

「ボンは甘い菓子が好きじゃからのお」

「坊ちゃん、いつもつまそうに食つかんなあ。」

「……そういえば二人とも最近厨房に入り浸ってたっすよね？」

「ああ、今日の為にな！」

「おう、会心の出来じゃったわい!!」

「予想ができて怖いつすよ……」

「泉坊はなんて答えたんじゃ？」

「いや……若が好きなんなんて思い浮かばなかったから本渡し
たっすけど？」

「ほおどんな本や？」

「これっす。」

「……………?」

「何で今泉坊がもつとるんかのお？」

「お前、渡す本間違えたんじゃねえか？」

「え?……ちよつと旅に出てきます。」

「まあ、待ちいや!!」

「若に怒られんは嫌や……!!!!」

・
・
まじめに話していても漫才になるといふ微妙なキャラたちでした・
・

最強は発狂す（後書き）

初っ端から長いです。一番最後のキャラを含め次回キャラ紹介をしたいと思います。

キャラ設定(前書き)

キャラ設定です。

キャラ設定

主人公：剣上院けんじょういん 不知火しらぬい

転生前：一条 不知火（いちじょう しらぬい）

武器：素手・剣

流派：剣上院流

身長：145cm 186cm

体重：体が金属できてんじゃねえの？ってくらいの重さ

髪：黒のストレート、肩にかかるくらいの長さ

好きなもの：ハッピー・イン・御汁粉・和菓子・つまりは甘いもの・
友達・家族

嫌いなもの：たまに感じる女性の危ない視線・無駄にうるさい奴

補足：神に叶えて貰える願い事が後二つある。

作者としては爆発して欲しい位のイケメン君。

魔法や気についてはまったく知らない。

原作は「子供の先生が来る」「修学旅行の京都で強い奴と戦う」「
なんかバグキャラがいる」「くらいしか知識が無い。」

『剣上院守護三人衆』

分家や本家から選出された特に強い三人

名前：柳上院やなぎのうえいん 松蔭しょういん

武器：仕込み杖

流派：剣上院流分家「柳上活殺剣術」

髪：ハゲ、すごい髭が伸びている。

年齢：不知火曰く、自分が生まれたときから外見があまり変わっていない気がするらしい

好きなもの：若者の将来の予想・不知火がお菓子を食べているときの顔・お茶

嫌いなもの：怒る不知火

補足：金を「金」泉を「泉坊」と呼んでいる。

色々世話を焼いてくれるがたまにいらぬ事までしてくる。

名前：剣上院けんじょういん 泉いずみ

武器：短刀

流派：剣上院流本家「短刀柔術」

髪：茶髪のポニーテール

年齢：23歳

好きなもの：楽なこと・団子

嫌いなもの：めんどくさい事・怒る不知火

補足：金のごとは「金さん」松蔭のごとは「松さん」と呼んでいる。
変なところで間違いを起こしては不知火に怒られている。

名前：蓮上院 金（れんじょういん こん）

武器：細剣

流派：剣上院流分家「蓮上細剣術」

年齢：34歳

髪：黒髪、ボサボサでそこまで長くない

好きなもの：激辛せんべい・面白いこと

嫌いなもの：怒る不知火

補足：松蔭は「とつつあん」泉は「泉」と呼んでいる。

「こん」と呼ぶと怒るので「きん」と呼ばれている。
悪戯があればこの人あり、「必殺悪戯大全 シリーズ全5巻」や剣
上院家のみで発売される「不知火写真集 全3巻」などで貯金がか
なりある。

なお欲しい方は応募者全員サービスで × まで

・
・
・
・
・

「刹那、どこに連絡しようとしている？」

「な、何でもあらへんよ!？」

「?・・・そうか」

まあこの会話が実際に在ったかどうかは本編で明らかになる・・・
かも?

最強の誕生日

side 不知火

「親父、来たぞ」

今俺は例の五段抜きを終えて親父の部屋に来た俺

「来たか。」

「……はい」

いつに無く真剣な雰囲気を出して居たので自分もまじめに受け答えをする。

「お前は遂に10歳になった。お前は才能があるからもっと早くでもいい気がしたが、まあ掟だからな……」

「何の話でしょうか？」

「お前も少しは気づいているとは思うが、家の流派は普通じゃない。」

……？

普通じゃない？確かに普通だったら斬撃が飛ぶとかありえないんだろっけど……

「この世にはな気という物が在るんだ。」

「気……ですか。」

「ああ、家の流派は本来気を使った技が主流。だが、剣上院の掟で10歳以下には使わせてはいかんことになっていた。しかし今日からお前も10歳だ。」

「これがその奥義書だ。」

「そういうと巻物を渡してきた。」

「不知火、俺はお前にこの家を継げとは言わん。だが、技だけは覚えていて欲しい。」

「……」

「お前は俺の息子、いや剣上院家の跡取りとしてその命や地位を狙うものは多いだろう。」

「お前は今でも十分強い、だがそれでも届かない奴はいる。だからこそこれを渡す。」

「はい」

「なんだかんだ言って、いい親父だと思う。」

「そりゃ試合とかするときは笑いながらぶっ飛ばされるけど。」

「それでも心配してくれたり、話をしてくれたりいろんなことを教わった。」

「だからこそ尊敬する。」

「すごい人だ、この人は……」

「さて、もう一つ。こっちが重要なんだが……」

「？」

「見合いの話なんだがなあ？」

「こついう所が無ければ・・・っ!!」

「あんたは何なんだ!? ちょっとは尊敬するところもあるってのにぶち壊しやがって!」

「なんだとう!? 照れるじゃねえか!」

「褒めてねえよ!? 何なんだよほんとおによお?

「あああ、もうやってられっか! 俺はいつかこの家出てってやるからな!」

「そんなもんは俺を倒してから言わんかあ!」

「おお! やってやらあ! 来いよくそおやじいいいいいい!」

「バキイ!!」

「グハツ!」

「なんのお!」

「その程度かああ?」

「バキツゴシヤツグキツ!!」

「隙ありいいいい!」

「なっ!?!」

親父は俺の脚を片手でつかみ、振り回し始めて……

「おやっさん、坊ちゃん、誕生会の来客が……ってなにやっせんすか!?!」

ちようど入ってきた金のほうに向かって投げた。

「ちよ!金、危ない!!!」

「え、あ、ちよつと!?!ガハア!」

「ちよ!金さん!?!大丈夫っすか?」

「おい、糞親父!被害者が出てんじゃねえか!どうしてくれとんじやああああ!?!」

「お前も犯人の一人じゃろがい!!!」

メキイツ!!!!

お互いの顔に拳がめり込む。

当然どちらもすごい力なのでお互いに吹き飛ばすことは火を見るより明らかだ……

「ちよ!こつち来てる!!!」

「泉坊!避けるな!避けると誕生会の会場に当たる!」

「ええええ！？そんな無茶なゴブツ！？」

俺ごと吹き飛ばされた泉は誕生会の会場の大きなドアを破る。
すると・・・

「なんだなんだ？誕生会の会場は移動したんか？」

「喧嘩か！ワシら分家の下克上じゃあ！！！」

「なにおう！？だったら俺ん所が一番やる！」

「おい！守護三人衆が潰れてるぞ！！！」

「ギャハハハ！喧嘩じゃい！」

・・・騒がしいのは嫌いだけど

でも、こう言うのもたまには悪くは無いやな？

「うおおおおお！糞親父！今度こそ決着つけてやんぞ！！！」

「おう、盛り上がって来たあああああ！！！」

その後剣上院家本家、分家、門下生などを含め総勢400人ほどで
大乱闘・・・

1時間ほどたった後

「あんさんらは、なにしてるかあああああ！！！」

母ちゃんや女性軍が強制的に武力介入で数秒の間に沈められた・・・
文字通り庭の池に

その後普通に食事など誕生会が行われることになったのであった。
いやあ、その場のテンションで舞いあがんのは駄目だな、うん。
今回の教訓だな。

「坊ちゃん（ボン）！プレゼントや！……！」

声がしたさきを見ると

「……おお！」

すごい、ハッピーのケーキ……

（坊ちゃんの顔が眩しい……）

（頑張ったかいがあったのお？）

「た、食べていいのか？」

「「べっぞべっぞ！」」

切り分けてさらにもって一口……

「うまい……」

（おお、坊ちゃんの顔が蕩けきっている……次の写真集の表紙はこれだな！……）

（いやあ相変わらずいい顔して食べるのお？）

うめえ、もうなんかカメラのシャッター音が聞こえるけど気にしなくても良いや。

「わ、若……これを……」

「ん？泉か。なんだこれ？お、時計……と解毒剤？何でこんなもん」

「い、いやあく最近物騒つすからねえ。うん、大丈夫つすよ。深い意味はないつす……ただ、なんと云うかもお、すみませんでした。」

この展開は……

「お前さんはまた余計な事を仕出かしてくれやがりましたんですか？コノヤロー」

つて居ねえし！？逃げ足速すぎだろ！

「あの……シロくん？」

「ん？おう、刹那か。」

シロっつーのは俺のあだ名。不知火つて言うのもめんどくさいからなあ。

「こ、これ誕生日プレゼント。」

「おう、サンキュ……リストバンドとクッキー？」

「え、えっとクッキーはウチが作ったんよ。泉さんに相談して／＼」

はい、さっきのはこれのフラグだったわけですね？

っーかこれ軽く死亡フラグだよね？

なんなの？バカなの？死ぬの？つてな感じで死に一直線だからね？

「あ、あとで食べさせてもらうよ。」

「そ、そっか……」

そんな明らかにガツカリすんじやねえよ——！
今食うしかなかったじゃんかよ——！

「やっぱ今食う……」

「う、うん！」

俺はピンク色の紙袋に入ったクッキーを一つ……手に取り。

「坊ちゃん！」

「ボン！」

「後は、任せた！」

カリッ！

「う、うまいよ……」

「そ、そっか／＼／＼／」

「ああ、金と松。俺……あっち行きたいからちよつと運んでくれ……」

「坊ちゃん（ボン）あんた男、いや漢ですよ——！」

ダダダダダダダダダダ！

「？」

・
・
・
・
・

「坊ちゃん、大丈夫ですか！？」

「し、痺れぐしゆり・・・呂律ぎやまわりやにやく・・・」

「ほれ、解毒剤じゃ。しっかし泉のボンは何の本を渡したんかのお？」

「知るか！！あいつどこ行きやがった！？」

周りを見回すが、一昔前に居るような手ぬぐいを頭に巻いてこそそそしている奴しかない。
くそっ！どこ行きやがった！？

「つて、バレバレじゃこの糞野郎おがあああああ！！！」

「ギャブハアアアアア！！がああ！気配消すために気を出してなかったから衝撃が直にいいいいいい！！？」

「おおおい、オメエはまたどーすればこんなことになっちゃったりしちゃうんかな？」

「ぶ、プレゼントの事聞かれて・・・ほ、本を渡したんっす！
でも渡す本間違えて・・・」

「あ？どんな本渡したんだ？」

「そ、それは「泉さん」せ、刹那ちゃん・・・」

「この本、有難うございました！」

『これでイチコロ大料理集！〜痺れる味が駆け抜ける〜』著：蓮上
院 金

「真の敵はお前だったか、魔王ゴールド!!」

「ええ！？ば、坊ちゃん！どうしたんですか！」

「うるせえ！大人しくバカみてえな事しか考えねえその頭を差し出
せ!!」

「ちよ、ご勘弁を!!」

ギャーギャーギャー!!

「？」

一人分かっていない上機嫌な少女を置き去りにして乱闘を続けてい
た・・・

翌日、リストバンドを付けて練習に出ていたところを見つかつて、親父とか馬鹿トリオに冷やかされたことはまったくの余談である。

さらに、その四人が池に浮かんで居たのは俺は一切関係……ない？

最強の誕生日（後書き）

いつかこの話の刹那視点も書こうと思います。

最強は旅立ち、物語は始まる（前書き）

ほんの少し原作に入ります。

最強は旅立ち、物語は始まる

side 不知火

さて、俺こと剣上院 不知火の誕生会が終わって・・・あれ？どの位経ったっけ？

え、あの時10歳、今は・・・12か！

うん、二年後！シャボンディ諸ヶゲフンゲフンツ！！

まあ、春ですね。桜が咲いてたりします。はい。

へ？跳んだ？何が？その二年間何をしてたか？

別に？気を使った技の修行やら剣上院闘技大会やら裏剣上院家との戦いとか、まあ見ての通り他愛の無い事しかなかったのさ。

え？気になる・・・そんな事は置いておいて。

「俺、旅に出ようと思うんだよねー。」

「.....」

.....へ？「.....」

親父、母ちゃん、三馬鹿、刹那に話を持ちかける。

刹那が居るのに疑問を持つちゃいけない。

そんな事を気にしていたらウチでは精神が持たないぞ？

こないだなんか母ちゃんと親父が喧嘩して、親父がどっかに吹き飛ばされたんだ。

その後、ニュースで動物園の檻でゴリラと腕相撲してる親父発見。そんな不思議現象が蔓延っている場所がここだ。

「.....まあ昔から考えてたことだし？あ、旅行きてーって」

「軽いつすよ！もうちよつと考えても良いでしょう！？」

「知るか。ほれ、親父にも言ってたたる？こんな家でてってやるー
て。」

「い、いや確かに言ってたが・・・」

「う、ウチのこと嫌いになつたん？」

「・・・刹那、それはなんかお前の台詞じゃない気がする。
っーか落ち着けよ。ほら、母ちゃんと金と松蔭見てみるよ。
あんなに冷静に・・・」

「刹那ちゃん・・・別れの夜・・・」

「忍び込・・・」

「・・・写真・・・取れ・・・う・・・」

断片的だが何故か聞き捨てなら無い単語の羅列が・・・

「お、おい？」

「」「」ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ「」「」

ゾクッ・・・

関わったら色々とめんどくさそうだよなあ。

でも今止めて置かないと後々不幸なことになりそうだが・・・

「明日にもここを出ようと思っからな。」

「「「早い!!もうちょっと考えてくれても!!」「「「

「ふふふ、もうすでに飛行機のチケットを買ってあったりするのだよ。」

「「「良いでしょう。行って来て下さい!!」「「「

「・・・なんでしょう、この温度差は。

俺は、無性に旅に出たくなってきたよ。

「・・・まあ良いや、俺は稽古行って来るからな。」

後ろから聞こえてくる高笑いは無視させてもらおう。

その後、晩飯に呼ばれるまで出て行かなかったという。
道場から気絶した男の子を抱えた現頭首が出てきたのはまったくの
余談である。

side 刹那

「・・・明日シロくんがでてまっ。

いつ帰って来るんやろか。ウチは中学に上がったらここから出てか
なあかんに・・・

「刹那ちゃん」

「へ？あ、シロ君のお母さん。」

「ちょっとこっちに来てくれる？」

「は、はい……」

なんなんやるか？

「ちょーつと眠っててね？」

「え！？」

そこで意識が途絶えた。

side 不知火

……良い月だ。

酒が欲しいな。

飲んだこと無いけど……

「満月を見ながら桜の木の上で転寝。たまにはこう言つのも良いねえ。」

ここは俺がたまに来る場所。

知ってる奴は居ない……と思う。

親父か母ちゃんに尾行されてたら分からないからなあ。

「ふむ、でも近くには居ないっぽいな……」

ガサツ！

「……え？」

あつれ〜？おかしいなちゃんと気配探ったのに……
そう思いながら音がしたほうにいつてみると

「……刹那さん？人の趣味に口出しはしたくないけど小学生で
放置プレイですか？」

「む！？むむ〜！！！」

猿轡して縄で縛られている刹那がいた。
む、手紙？

『据え膳食わぬは男の恥よ？まあ、あなたも刹那ちゃんもまだまだ
お子ちゃまだからキスクらい』ビリイツ！！！！

駄目だあの親。早く何とかしないと……ホントに……
刹那の縄を解き、猿轡も外す。

「はあ、お前はなにやってんだか。母ちゃんも母ちゃんだが、あつ
さり捕まるお前もお前だ。」

「そ、そんな事言われたって……シロ君のお母さんになんて勝
てへんよ。」

「・・・まあ、確かにまだ勝てねえかもな？」

「いつか、勝てるようになるかな？」

「おう、きっとなれるさ。そんな時は是非ご教授願いたいね。」

そんな軽口を叩いていた。これから暫くは話せないだろうからなあ・・・
そんな事を考えていると案の定、刹那の口からこんな言葉が出てきた。

「ホントに行っちゃうん？」

「ああ、俺はこんな所に籠っているのが耐えられないからな。いろんな所を見てみたいし。いろんな事を知りたい。・・・お前だってここからいつかは出るんだろう？」

「うん、麻帆良言う所に行くことになつとる。」

「ふ〜ん、友達が居るって言ってたところか？」

「うん、そこに行って今度こそこのちゃんを守るんや。」

「へ〜、守るか・・・ちゃんと仲良くしなきゃ駄目だぞ？」

「・・・うん」

「お前が何を心配して守るとか言ってるのか知らんし知る気もないが、心残りが有るんだったら尚更ちゃんと謝って仲良くしとかなきやな。」

「ホントに良いのかな？ウチはこのちゃんを守れんかったんよ？」

「チビツ子が何を言うか。守るために強くなつてんだから昔のことなんて気にすんな。」

ガキなんだから仲良い奴と遊んでるのが一番だ。

それはどんな奴でも変わんねえ。

俺から言わせりゃあれだな、お偉いさんのとこの息子とかが習い事とか強要されてるのとかは嫌だ、子供なんだから自由に遊ばせろよ！つてな？」

「……………えらい大人びた事いうんね？」

「まあ刹那みたいにガキじゃねえからな。」

「……………ふふっ」

「……………ここは怒る所だろう。ま、まさか、本気で刹那はMなのか！？」

「なんか解らんけどそれは違う。」

くっ！心を読みやがったのか。

いや、まあ明らかに顔に出ていたんだが……

「で？何で笑うんだ？あのタイミングで」

「え？そ、それは……………」

「？」

「・・・それより、なんか話題が逸れてる。」

ちっ！気が付きやがったよこの子。

「誤魔化せると思ったのによ。じゃ、あれだ。俺もいつかその麻帆良つてとこに入学する。」

そしたらお前も会えるだろ？」

「ホントに！」

「おお、俺は約束は破らないぜ！・・・多分」

「・・・」

だからそんな悲しそうな顔スナよー。嘘に決まってるじゃねーかよー。

「じゃ、あれだ！約束の証に・・・」

「？」

side 刹那

自分が4歳程だったろうか？

最初の友達に会い、憧れの、自分の中で最も強い人に出会ったのは・

・
本人は覚えてないんだろう。

きつと私があの人記憶に入ったのは7歳に成ったばかりの時だと

思う。

掛け替えの無い、自分のもっとも親しい二人。

刹那4歳

「せつちゃん！遊びにいー」

「うん！このちゃん」

その日は確か、稽古が終わった後にお嬢様の御家へ行ったのだったか。

その後、裏山の方へ遊びに行った。

暗くなるまで遊んでいた。

そう、小さい時とは本当に時間が短く感じるもので、あっという間に暗くなっていた。

暗くなった裏山は4歳のときの私たちには

「せつちゃん……ここ、どこ？」

「い、このちゃん……」

迷ったり、怖がるには十分だった。

あの時ははつきり言って恥かしくなるほどの慌てっぷりだった。

そして、事件……と言うべきかは解らないが、ある事が起こった。

「くくく、近衛家のご令嬢、近衛木乃香様ですね？」

木の陰から男が出てきた

「ひっ!?だ、だれ?」

「こ、このちゃんに近づくな!!」

「む?ああ、最近ご令嬢に忌み子の娘が付き纏っていると聞いたな。邪魔だ、どけ!!」

そう言つて男は拳を振り上げ私に襲い掛かり、私は思わず目を瞑つた。

だが……

「あゝあゝ、修行でたまたま通りかかったのはいいけど。大のおっさんがか弱き少女になにやっちゃってんの?」

私たちより少し大きい男の子が来た。そして、その男に蹴りかかつて行つた。あの時は驚いたな……

「な、ゲボハツ!?くっ!な、なにをする!!」

「ありや?意外と丈夫。じゃこれでオラア!!」

「グハツ!?な、なな、しよ、障壁が!」

「むむむ、まだ倒れないのか!?ふいにーっしゅ!!」

「き、気も何も使っていないのに障壁を破るなんぞ有り得る訳がギヤア!!」

「気？なに言ってるんだ。ドラゴン　ールの読みすぎじゃね？」

緊張している所だったのにすごく力が抜ける会話をしながら、その人は現れた。

・・・何故ドラゴン　ールに限定していたのかは知らないが。

「さて、君たちはここら辺の子？この時間までここに居るってことは迷子だよな？」

どこの家かな？名前言ってくれば大体解るけど。」

「近衛木乃香って言うんよ。」

「さ、桜咲刹那です。」

「ふむふむ、近衛に桜咲・・・ああ、あのデカイお屋敷の〜」

そう言いながら不審者と思われる男（実際は何か起こる前に撃退されたから一応未遂だが）を縄で縛りながらこちらに話しかける。

「はあ、じゃ行くか。立てるか？」

「「こ、腰が抜けちゃって・・・」「」

「あらあら、まっ、ガキンチョだしな。びびっちゃう事もあるか。」

「そこまで変わらんかと思うけど・・・」

お嬢様が男の子に言う。

「ははは、ちげえな。」

「何が違うん？」

「まあ、御嬢ちゃんたちみたいにガキじゃねえからな。」

この台詞、子ども扱いされている様で、少し嫌だと思ったけれど覚えていた、そう私が子供であなたは大きかった。

……あの時笑った理由、解ってなかったのは少し寂しかったけど。

けれど、その後あなたに再会して。あなたを見ているうちに解った。

シロ君、あなたはまるで呼吸をするように困っている人を見たら助ける。

それが普通出来ない様な事なのに、あなたはさも当然に、いや逆に「なんで助けないんだ？」

と聞き返して来そうなほど普通に人を助ける。

昔、不思議に思ったことがあった。

いくら頭首の息子だからといって、こんなにも慕われるものかと

守護三人衆の人たちは笑いながら上下の関係と言うより歳の離れた友人のように接し。

分家の人たちも信頼を置いている。

今だからわかるが、親が偉大な人だとそれに重ねて見られる物だ。

なのに、あの人は自分と言う一人の人間として見られていた。

たぶん、聞いても理由なんて帰ってこないんだろう。

帰ってきたとしても答えは2通り。

「なんとなく。」

「助けられたことがあるから。」
「そんな物だろう。」

つまり接して見なければ解らないのだろう。

「ふふ」

「せつちゃん上機嫌やなあ、どうしたん？」

「あ、お、お嬢様！」

「せつちゃん？」

「う、あ、このちゃん……」

「せつちゃん、たまにそれ見て笑つとるなあ。なんなん？それ」

「解っていないなあ。木乃香あ！そんなもの好きな人からの贈り物に
決まってるじゃん！」

そうよね？刹那さん！ああ、私も高畑先生から（ブツブツ）

「へえ〜！そうなん？せつちゃん！！」

「い、いえ！違いますよ！？」

・
・
・
・

「おお、俺は約束は破らないぜ！……多分」

「……………」

少し悲しそうな顔になっていただろう。

「じゃ、あれだ！約束の証に……………」

「？」

そう言っただけで彼はあるものを差し出してきた。

「なんか母ちゃんがくれた奴でな。二つ一組なんだが俺がこの黒いの持ってるから、お前はこの白いの持ってる。約束の証ってことだな。」

……………

「せつちゃん？どうしたんや？」

い、いけない。少し惚けてた。

「いえ、何でもありません。」

「あ！早く行かなきゃ遅刻よ二人とも！！！」

「あ、待ってーなアスナ！行こ、せつちゃん！！！」

「はい！」

私は右手の人差し指にある『白い指輪』をもう一度見て、走っていた。

「はあ、駄目だ。日本はやっぱり人が多いね。ゴチャゴチャしてる。」

刹那達が居た所から少し離れた所に、身長が高い185cmほどの男子がいた。

「……まあ、これからこのどっかの学校に通う訳だ。元気にしていると良いけどなあ？」

その男子は『黒い指輪』をしていた。

そして……

「学園長、

です。」

「おお、入ってくれ。」

「何か御用でしょうか？」

「ああ、君が今副担任をしているクラスの担任の先生がもうすぐ来るんじゃないよ。」

最強は父親です？（前書き）

色々と原作から離れていますのでご注意ください。

最強は父親です？

side 不知火

「はあ、久しぶりの日本だ〜！」

「何が久しぶりや。外国行ってたんは去年の話やろ？それよりとーちゃん、腹減った。」

「我慢しろ、つーかよ、コタ！お前は何故俺のことを父ちゃんと呼ぶんだ。」

俺は子持ちじゃないのに父親になっちまうぞ？兄ちゃんとかじゃ駄目なのか？」

「そんなん知らんがな。とーちゃんはとーちゃんや。用事があるんやったら速よ行って飯食いに行こーや」

はい、ここで疑問に思う人もいるでしょう。

「え、この子誰？」と……

俺は旅に出ました。

最初の2年間は日本のあちこちを巡ろうと決めてあちこち行っていたころ。

たまたま京都によることになった。

そして家に一旦帰り。

次の日、駅に向かう途中に安全祈願として神社に行つたわけですが、すると、あらまあびっくり！犬耳の生えた男の子が倒れているではありませんか。

聞くと孤児らしく色々危ない橋を渡って生き永らえてたらしいので

「おし、じゃあ行くか。」

side???

「学園長、祭崎です。」

「おお、入ってくれ。」

「何か御用でしょうか？」

「ああ、君が今副担任をしているクラスの担任の先生がもうすぐ来るんじゃない。」

ふふふ、やつとだ。この世界に来て早16年。

神にチート能力をもらい、この歳だが原作介入するために学園長に力を見せたりしていたら案の定担任をやってくれないかと御達しを受けたのがつい昨日のようだよ。

・・・しかし、ここは本当に自分が知っている漫画の世界なのだろうか。

いや、大筋の流れは変わっていない。

しかし違いが3つほどある。

まず一つ、桜咲刹那と近衛木乃香の関係。

アニメ版のほうだったらまだしも原作では修学旅行編までは関係は修復されていないはずだ。

そしてもう一つ、知らない生徒。

原作には生徒は31人、しかし今の2-Aの在籍生徒数は32人。

出席番号5番、有明^{ありあけ} 葉花^{よしか}

こんな奴は原作には居ない。

席はエヴァンジェリンの隣だ。

エヴァンジェリンとよく話して居るのを見かける。

そしてさっきの事を踏まえて三つ目。

エヴァンジェリンの封印が解けている。

ここから推測されるに……

有明 葉花は転生者。

尚且つ、エヴァンジェリンの呪いを解いたのはあいつ。

……ハッキリ言っていていい気はしないな。

俺が呪いを解いて恩を売りたかつたんだが……

あわよくばエヴァフラグも……

ま、まあ良い。

俺はロリコンではない……うん、無いよな。

まあ、俺は他に狙っている生徒。

それが一番目に説明した桜咲と木乃香だ。

一応警備の仕事で助けたり、図書館島での部活動に参加したりしているが

まあ、頑張るほか無いか。

「それでお。祭崎くん、君も知っているだろうがまだ彼は十歳で

な。

表と裏、どちらの面でもサポートして欲しいのじゃ。」

「はい、解っています。この祭崎まつさき 翔とよやり遂つひげて見せましょうー！」

「フオッフオッフオ、楽しみじゃわい。」

「学園長！」

「む、来た様じゃの。」

よし、頑張るか。

side 有明

「フッフ」

「む、どうした。上機嫌だな、葉花。」

「ん、昨日このかっちに占ってもらって今日は良い事あるでしょ
ーって言ってたんだよ。

あと出会いは大事にとか言ってた気がする。」

「ふん、占いか。まあ信じる信じないは勝手だがな。」

「僕は別に占いを信じていないって訳じゃないんだよね。
まあ、今日は特別という事だよ。」

「ふん、まあ良いがな」

今日は原作開始か！。

いやー嬉しいな！。

色々と待ったからな！。

フッフ、フッフフッフ、ウッフッフッフ

「・・・葉花。お前、大丈夫か？」

「大丈夫だよ！。」

生ネギ君、早く見たいな！。

会ったら。

・・・どう虐めてあげようか

愛しのエヴァを苦しめてた奴の子供だからな！。

まあ、問題は副担任先生かな？

よく解らないけど強いんだろっし・・・

僕が知っている原作の中に居なかったしね。

この世界がネギまの世界を忠実に再現してあるとするんだったら

彼は居ない筈だからな。

きっと僕と同じ転生者だろう。

ネギ君側に味方すると厄介かなー？

私はあの人嫌いだなー、なんか目つきがいやだ。

いや、別に私が百合存在って訳じゃないよ？

でも中々良い男の子が居ないのだよ。

はあ、どこかにエヴァより魅力的な男の子は存在しないのだろうか。

・・・

ネギ君は最後のほうは中々良い男の子だけど・・・

ま、エヴァが居れば基本オツケーなんだけどね。

「そついえばエヴァもご機嫌だよな？」

「む？そう見えるか。まあ、久々に本当の意味で正義と悪という物を理解してる奴が近じか来るのだよ。」

「ふん。」

あれ？エヴァにここまで言わせる人なんて原作キャラに居たっけな？

side 不知火

「さて、遅くなってしまった。」

「何でここまで来んのに30分もかかんねん。」

「しょうがねーだろ、俺が最後にここに来たの4年くらい前だぞ？
そんなの覚えてねーっつーの」

「俺は嫌やで？ガキに囲まれてやってられるか。」

「ガキは黙ってようか？」

俺はコタの頭を上から押さえつけくりくりと撫で回す。

「ちょ、痛いわとーちゃん！！」

「とーちゃん言うな、ほら放心状態じゃないか二人とも。」

「とーちゃん……一体何歳で……」

と、学園長が言っている

「勘違いすんなー。俺はまだ16だーこいつは10くらいだぞ？
何だ？6歳の時生まれたと？んな訳有るかー」

「ははは、君は大人びて見えるからね。
時々同じ年くらいじゃないかと思ってしまうんだよ。」

「あんま嬉しくねえ。まあ、学校。
何処になるんだ？」

「ふお、忘れておった。ほれ、これが資料じゃ。」

「おーう、せんきゅー」

「さて、ここからが本題な」
嫌だ「……最後まで聞いてく」
嫌だ「」

「すいません聞いて嫌だ」
ホンのちょっと嫌だ「……」

どうせ前来た時みたいに面倒ごとに決まっている。
このぬらりひよんの願い事は極力叶えないことにしているんだから
な。

「俺は嫌だ。コタは知らん。コタに仕事の依頼が有るんだったらコ
タに言え。」

「おう！喧嘩、戦い上等やで！！」

「・・・まあ腕はなんとなくおぼろげに保障しよう。」

「なんやそれ！！」

「未だに俺に触れもしない奴が何を言うか。」

「ははは、仲が良いね。まあ学園長、本人が嫌がっているんですか
ら止めて置きましょう。」

「む、そうじゃのう。ほれ、これが君の寮の鍵じゃ。

他に住人はおらんから二人で好きに使うといい。もともと三人部屋
じゃから十分じゃろ。

高畑君、案内してあげてくれ。」

「はい」

「おう、せんきゅー！

つと、その前に、朝飯食ってないんだよね。」

このままじゃ餓死するからどっか食える所無い？」

「そつちで。腹ペロやー」

「ははは、解ったよ。」

「じゃあついでに学園の案内もするよ。」

「おお、せんきゅー。ほんじゃまあ行くつか。」

そう言ってドア（だった所、今はただの枠）を出て外に向かう俺達であった。

「・・・え、これ直すのワシなの？」

・
・
・
・
・
・
・

「さて、部屋の片付けもしたし用意するもんした。重要な学園施設も高畑せんせーに教わった。することもないし学校の資料つての見るか。」

「俺も行かなあかんの？」

「俺はともかくお前は行かなきゃ駄目だ。義務教育だし。」

ま、俺も通ってないけど。」

そして封筒を開けてみる。
出てきたのは……

『ごめん、用意できなかったのじゃ。許してくれ！

代わりと言っては何じゃが店を開ける事を許可しよう。

君が前作った菓子は美味しかったからのう。

これでもいつでも食べら……ゲフンゲフン！

エヴァンジェリンが一度私の元へ来いと言っておったぞ？

あんまり怒らせん様にしてくれ、しわ寄せがこっちによって来るの
じゃ。

あと小太郎君の学校も用意できそうに無い。あしからず。

by 皆のアイドル学園長 』

「……………」

「あ、あの、とーちゃん？どうしてそんな微妙な笑みを浮かべてる
んや？

あ、あと気が漏れ出てるで？」

ふふふ、なにを焦っているんだ。こう言う時は豆知識で落ち着かせ
てやるぞ。

「コタ、知ってるか？」

「へ？なにを」

「殺人つてのはな。人を殺すから罪に問われるんだぜ？
じゃ、行って来る」

「待つんや！そんな殺気撒き散らしながらどこ行くねん！
後その豆知識なんでこのタイミングで言うんや！？
とーちゃん落ち着きい！！」

「ええい！離せ！

あいつまったく悪びれてねーじゃん！！俺の作った菓子が食べたか
っただけじゃん！

なんだよそれ！殺すのはまだしも気で強化した拳で全力で殴るくら
いはしねーと落ち着かねえ！！！！」

「それやったら死ぬやる！！」

「大丈夫だ！殺したらきつとあの頭が変形して新しい学園長が出て
くるから！！！！」

「なんやそのホラー！？」

「ウツガ~~~~~！！！！！！」

その日一日叫び声が止まなかったか………

最強は父親です？（後書き）

今のところ原作との相違は

- ・ 転生者の存在（三人）
- ・ エヴァの封印について
- ・ 小太郎の位置
- ・ 木乃香と刹那の関係

ですね。

最強は最強種に会う。

sideエヴァンジェリン

ふむ、先ほど電話があり不知火が来るそうだ。

私が認める数少ない友人とも呼べる部類の人間だ。

まあ、それは置いておくとしてだ。

「なにをソワソワしている、葉花。」

「だって、愛しのエヴァがこんなに楽しそうしてんだよ。どんな人が来るのかワクワクするじゃないか！」

「・・・は？楽しそうだと？」

ふむ、楽しそう？

私が楽しそう・・・

まあ十分に有意義な時間になることにはなるだろうな。ばーやにイライラさせられていたから余計だな。

「まあ、否定はせん。面白い奴といえはそうだからな。」

「へえへえへえ、エヴァがこんな事言うんだ！」

僕はますます楽しみだよー！

ねえ茶々丸は会った事あるの？」

「いえ、私はまだ作られていませんので。」

「ケケケ、知ツテンノハオレト御主人ダケダゼ。」

「あゝ、ずるい！」

「待ってれば来るんだから大人しくしている。

と、もうそろそろか。茶々丸、紅茶でも出してそこに置いておけ。」

「・・・？ はいマスター。」

「なんで紅茶なんて置いておくのさ。」

「まあ良いだろう。気にするな。」

「ソウダゼ、気ニスンナ

そうやって従者の茶々丸にテーブルの空いたスペースに紅茶を置かせる。

カランコロン

む、来たか。

side 葉花

カランコロン

呼び鈴の音が鳴って茶々丸が扉の方に向かっていく。

「あ、待って茶々丸。僕も出る！」

そう言つて僕と茶々丸は扉の前に行き扉を開ける。
さてさて、楽しみにしていたのはどんな人かなーと期待を抱きなが
ら見た扉の先には……

「あれ？誰も居ない？」

「サーモグラフィには反応があつたのですが……」

「エヴァー！誰も居ない……よ……」

振り返つてエヴァに確認を取ろうとした。

「俺は紅茶じゃなく日本茶とかそっちの方が好きなんだがなー。」

「文句を言つな。それでも客人か？」

「まあつまりから良いがよー。」

……あれ？

「え、エヴァ？」

「なにを二人ともそんな所で突つ立っている。早くこっちへ来い。」

「え、だつて、あれ？今誰も入つて来てない……ええ！？」

エヴァと一緒に紅茶を飲んでいる人を見ながら驚く。

髪がすごく長くて後ろで束ねた長身の男の人だ。

「随分と賑やかになったな。」

「ふん、お前の入り方がおかしいのだ。普通どんな奴にも知覚されないで背後に立つなんてできる様な事ではないだろう。」

「うつせーよ、癖だ癖。ウチに悪戯大好きな奴が居てな、部屋とか家に入るときは最速で入らなきゃ厄介な罠に嵌るからな。」

「どんな家だよ！、と突っ込みたいのを我慢しつつ。今の現象について考える。」

まず、私と茶々丸が玄関の前に立っていた。

空ける前には確かに茶々丸がサーモグラフィで外の様子を確認して居たから扉の前に居たのだろう。

で、扉を開けた。・・・誰も居ない。

振り向く。

さつき茶々丸が用意した紅茶をすすっている男の人がもう家の中に居た。

「・・・いつ入った？」

「そりゃ扉が開いたから入ったんだけど？」

「やめとけ葉花、こいつに関して常識をぶつけても何もならん。本当に空いたから入ってきた、それをお前らの知覚できない速さで行った。」

それ以外返答は帰ってこないぞ？」

「……いやいやいやいや！」

僕だって神様から貰ったチート能力で反射神経とか動体視力とかすごく上がってるはずなんだけど？

五感とかも視力はアーチャー並に良いし、聴力は3km先の言葉を聞き分けたりそれはもう色々チートを盛り込んだ筈の僕が知覚できない？

どんな人が顔を見てみようと回り込んだ。

「っ！？」

「ん？ああ、自己紹介してなかったな。剣上院 不知火だ。」

「ああ、こいつは有明 葉花。一応私の従者だ。」

それであっちに居るのが絡繰 茶々丸、あちらも私の従者……っ
てどうした葉花。」

「あ、有明葉花。じゅじゅじゅ、14歳です。よよよよよ、よろしくお願ひします！！」

「……？ああ、まあよろしく。」

少し微笑んでくれた気がした。

「はう／＼／＼／＼」

「どうしたんだエヴァ、この子は……なにを笑っているエヴァ」

「いやいや、クククッ。まあ病気だよ。とても厄介な物だ。」

ある意味不治の病だな。」

「ケケケ、御主人ト始メテ会ツタ時モソナ感ジダツタナ。」

「クククククツ、葉花。お前はあつちで休んでろ。」

「そんなんじゃまとも会話できんだろ。」

「うう、はい」

side 不知火

「……どうしたんだろつかあの子は、顔赤かったから熱でもあんなのかな？」

「さて、久しぶりじゃないか。」

「おう、で何のようなんだ？俺は今すぐにでも学園長を暗殺してあの長い頭から新しい学園長が生まれるのを見たいんだが？」

「ケケケ、面白ソウダナ。俺モ連レテ行ケ。」

「おう！行くか！よし、じゃあなエヴァー！！」

「ああ、じゃあな……ってちょっと待てーい！！！！」

「なんだよのりわりーな。」

「ソウダゼ御主人、折角エイリアン討伐ニ行コウト思ツタノニヨー。」

「

「ええい、妙なところで仲が良いなお前らは！」

「ああ、マスターそんなに暴れると危ないです。」

「ああ、大変だなこいつを抑える従者も・・・」

「まあまあ、暴れるなよ。そもそも用が有るなら早く言えよ。学園長ボコしに行くのは本当なんだから。」

「別にあいつを煮ようが焼こうが別にかまわんがどうしてそこまでしようと思っただ？」

「あの野郎、俺が学校手配しとけって言うといたのに手配しねえで俺に菓子屋をやれだの何だの・・・チャチャゼロ。準備はいいな！」

「オウ！」

「だー！もうお前らは黙ってる！！！」

「話はさっきお前が言ったことで大体すんだのだがな。」

「俺が言ったことで大体すんだ？」

「ああ、ここに来てなにをするかとかそう言う事か。」

「ま、一つ済んだ所でもう一つ。」

「お前、葉花と戦ってみんか？」

「ん？やだ」

「少しは検討しても良いんじゃないか？」

「嫌だ、そもそも時間無いし。あつてもめんどくさいし。お前と前に会った時戦つたのはお前が無理矢理襲い掛かってきたからだからな。正当防衛だ。」

「……襲つたんですか。マスター」

「……襲つたんだ。エヴァ」

「ケケケ、バツチシ襲ツテタゼ」

「なんか意味合いが違う!!というか葉花!いつ来た!」

「んゝさつき?

「というか今の話聞いてエヴァと不知火さんの出会い話聞きたくなくなっちゃったー!

「ねえねえ、聞かせてよ。」

「……長くなりそうだから俺帰っていい?

「店を開くにしてもその準備をしないと生活できないから。」

「ちっ!行け行け。そのうち冷やかに行ってやる。」

「へいへい、わかりましたよー。じゃあな」

そう言つて俺はエヴァの家を後にするのであった。

sideエヴァンジェリン

「ぶーぶー、なんで帰しちゃうのさー。」

「ふん、顔が真っ赤のままの奴に言われたくないな。少しほっとしているだろう?」

「だって、キヤーキヤー! もろタイプだったよー!! 性格は知らないけどエヴァと仲がいいんだったらそこまで悪者じゃなさそうだしー!!」

「……お前のその一目惚れはどうかならんのか。」

「良いじゃないか。それよりエヴァ! あの人とどうやってあったのさ! 教えてよ。」

ふむ、確かに気になるだろうな。

あの邂逅の仕方も普通ではなかったからな……

・
・
・
・
4年前、エヴァンジェリン中学一年生(4回目)

あの時はまだ呪いが解けていなかったなので屋上でサボっていた時だ。

「今と大して変わらないじゃん。」

「うるさい、黙ってる。」

まあ屋上に居た訳だ。

そこから何気なく町の様子を見渡した。

「・・・む？タカミチか。」

なんだあのガキは？」

そしたらタカミチが子供をつれて歩いていった。

私は腐っても吸血鬼だ、そこらの人間よりは目は良いのでな。

こちらから観察していたんだ。

「いやー、高畑せんせー。この学園はほんと変わってるっすねー。」

「ん？そうかな。」

「なんかデカイ木あるし、図書館は畏だらけだし、学園長が化け物だし、魔法使いの集まりだし、学校でできる町だし、色々変な部活があるし、それに学園長が化け物だし、食券で賭けしてるし、リアルストリートファイトがあるし、やっぱり学園長化け物だし他にも・・・（以下略）」

「・・・ははは、そうだね。」

おう、学園長のところ突っ込みは無いのか。

折角大事なことから二回、かと思いきや念を押して三回言っていたのに。

「それに・・・」

「ん？」

「なんか変な金髪少女はこっち見てるし、ね？」

「へ？どこに・・・」

「まーまー、いきましょー。めんどくさいのは苦手ですし」

「え、あ、ちよつと！」

俺にロリコンの気はねーのですよー。

え？いや、なんとなく言ってみただけ。

「今、こっちを見た？この距離で・・・タカミチと居る時点で一般人ではないだろうが・・・ふむ、良い暇つぶしができたかもしれないな。」

その金髪幼女も薄く笑いを浮かべていた。

「続きはウエブで！」

「なに行つてんやとーちゃん。」

「いや言わないといけない気が……」

最強は最強種に会う。 (後書き)

ウェブとか無いです。

また次回読んでくれるとうれしいです。

最強は戦う。

sideエヴァンジェリン

「さて、ジジイ。昨日タカミチが連れていたガキは何者だ？」

「ふおっふおっふお……どこで嗅ぎ付けおったんじゃ。」

「屋上から町の様子を見ていたら居た。」

「……何もせんでくれよ。下手したら学校が滅ぶのでな。」

「滅ぶ？なぜだ」

「はあ、剣上院家のご子息じゃわい。いや、現頭首はなにをしようが動かんかもしれんがそれ以外のものが厄介じゃからのう。守護三人衆が来た時点で危うい……」

「まあいい。あのガキ、まったく戦えないと言うことはあるまい。町のほうから私を見ていたのだからな。」

「……確かに剣上院始まって以来の神童と呼ばれているらしいが、じゃからといって何もしないでくれ」

剣上院か。近衛 詠春の話に一度だけ出てきたな……
ククク、生涯無敗か。人間如きが語るのはおこがましいだろう。

「エヴァンジェリン、顔が悪人になっておるぞ。
お願いじゃから何もせんでくれよ？」

「解っている。『何もしなければ良い』んだな？」

そう言っつて私は扉を出て行くのであった。

「エヴァンジェリン！そういう振りじゃない！ホントにやめてくれ
〜〜！！」

ジジイが何か言っているが聞く耳なんぞもたん。
ふふふ、どうやって戦いにこじつけるか・・・

「不知火君が滞在する1週間。何も起こらないよう祈るしかないの
う。」

・・・いや、その手があったのう。」

ふおっふおっふおと学園長室から笑い声が響き渡るのであった。

side 不知火

「ふああああああ・・・眠い。」

けど眠れる雰囲気じゃないよな！。あーあー、どこの誰だか俺に明
らかな敵意を持つてるな！。

めんどくせえ、俺何かに取り憑かれてんのかな！。

どう思っつよ。」

『私じゃないですよ!?!』

「あゝ、そう言えば幽霊って言ってたっけ。忘れてた。」

『わ、忘れてた・・・私が悩み続けてる理由をそんなに簡単に忘れ
ますか普通。』

ここ、麻帆良学園に来た俺は何故か幽霊と雑談していた。

「いやー、やっぱり変なところだな。」

幽霊までいんのかよ。ここに来れば某なんか変な団の団長も満足で
きるんだろっな。」

『・・・誰ですか。それ』

「いや、いい。それにしても何で幽霊なんてやってんの?」

『なぜと聞かれても解りませんよ。』

でも初めてですよ!私が見えた。なんか色々と霊媒師さんとかが来
て御被いとかしてましたけど見えた人はあなたが初めてです!』

「俺も幽霊なんて始めて見た。いやー、お互い良い経験だね!。」

・・・ふう、今日は疲れた。帰ったほうがいいんじゃないの?さよ
ちゃん。」

『あの、いつまで居るんですか?』

「あゝ、一週間程度だけどここにまた来るからどうとも言えないな。
ほれほれ、帰らないといういろと危ないよ?」

『危ないって何ですか？』

「明日も話し相手ぐらいにはなってるから。今日は帰れ。」

『はい。』

約束ですよーとか言いながら手をぶんぶん振ってどこかへ帰って行った。

幽霊ってどこ住んでんだろうか。

「で、何ですかお嬢さん。夜道は危ねーですよー。」

「ふん、お嬢さんと呼ばれる歳でもないし私はそこまで弱くは無いのでな。」

「なに、成長が止まっちゃった哀れな感じ？

それとも厨2病的な感じ？」

「どちらかと言えば最初だが・・・なにか癪に障る言い方だな・・・」

「それにしてもさー。なに？本気モード？なんか昼間に見た時と威圧感が違うんだけど？」

「ふん、それくらいは解るのか。

封印が一時的にだが解かれたのだよ、といっても解らんか。」

「・・・やっぱ厨2病的な感じのほうだったのか。」

「違つわー！ー！ー！」

・
・
・
・

「ちよちよ、チョット待つて。なんでエヴァ呪いが解けてるのさ。僕が解いたんだからこの時はまだ封印状態じゃなの？」

「何か知らんがジジイが私があつた後に正式な試合として剣上院家とやらに連絡したらしくてな。ジジイもなんだかんだいってあいつの実力が気になったのか私の呪いを一時的に解いたのだよ。まあ、もちろん反対する面子もいたが・・・これは後の話につながるから黙っておこう。」

「ケケケ、ソコカラ文字通り襲イ掛カツタンダゼ。」

「でも、不知火さんはその時まだ12歳位だったんでしょ？最強状態のエヴァに敵うとも思えないけどなあ」

・
・
・
・

sideエヴァンジエリン

「チャチャゼロ！行け！」

「アイサーー！！！」

「うっはー。なにそのキリングドール怖いなー。」

「ふん、せいぜいあげ！リク・ラク ラ・ラック ライラック・
・・・」

「ん〜、なんか聞いた気がするな学園長から
え〜と、え、え・・・？」

ふん、流石にジジイも忠告くらいはしていたか。

「あーエヴァンゲリオン！！」

「なんじゃそりや！！！違う！私は吸血鬼エヴァンジェリン！『闇
の福音』とも恐れられた最強の悪の魔法使いだ！！！」

「ほーほー、そいつあ御大層なこと。つーか魔法の詠唱いいの？」

「あ、しまった。」

くそ、奴のペースに乗せられていた！

「ケケケ、ヨソ見シテテ良イノカヨ。」

「だから怖いよ。もう足もガッタガタ。」

「サツキカラ避ケナガラ悠長ニ話シテンノハドコノドイツダ。」

「ん〜？俺かな。まあ俺も負ける訳にはいかないんで。戦わせても
らいますよ。」

む、雰囲気が・・・変わった？

「剣上院 不知火いつちよ相手してやるよ！来い！！！」

「ケケ！言ワレナクテモヤツテヤル！！」

そう言つてナイフを振り下ろした、だが

「もつと良いナイフ使つたほうがいいぜ？

剣上院流体術、鬼獵！」

異常な気の集中！？

「それはヤバイ！逃げるチャチャゼロ！」

ギイイイイイイイイイイイン！！！！

「・・・あ、やっべ。町の中つて忘れてた。

どうしよう。修理費とかこの場合どうなるんだ？」

「くっ！氷神の戦鎚！！！！」

「え、なにそれ。ハアツ！！！！」

あれを素手でどうにかするか・・・

「チャチャゼロ！動けるか！？」

「あ、無理じゃね？俺、意外と本気だったから動かない程度には

なつててくれないとショックなんだけど。」

「く、軽く言ってくれるな。油断しきっていた。」

「そりやお疲れさんってことで、俺疲れてんだよ。」

負けを認めてくれなきゃ俺は勝負を受けたからには帰れないんだけど、まだやるの?」

「なめるなよ?この私が負けを認めるなんてことがあつてたまるか! エクスキューションナーソード!」

これでも・・・

「喰らええ!!!」

「げっ!?!」

パキーン

そんな音が響いた。

「それ、ガチで危なくね?」

「なんだ、その、腕は・・・」

奴はこともあろうにエクスキューションナーソードを手で受け止めおつた。

・
・

・
「・・・手？」

「手だ。」

「素手、つてこと？」

「いや、厳密には違う。」

「マスターのエアクスキューションソードを手で止めるのは理論上不可能です。」

「確かに不可能かもしれんが。思い当たる奴が何人か居るから微妙だな。」

「まあ思い当たるのは本当に素手で受け止めるから放って置くとして。」

・
・
・

「これ使うとか思って無かったです。はい。」

「なんだそれはと聞いている！」

「えー、気を腕の細胞一つ一つに限界まで練りこませて見ました。ぶっちゃけこれ習得すんの大変だったなー。いやーこれなかったら死んでた。」

「一応、鬼門開放って名前の技らしい。」

「・・・なんて言った。こいつは

細胞に気を練りこんだ？

下手したら咸卦法どころか私の闇の魔法に匹敵する難度だぞ・・・
齡若干12のガキがここまで・・・

才能、か？

だが・・・

「才能だけでどうにかなるものでもないぞ？世の中は！..!」

『凍てつく氷枢』！！！！！

「なっ!?!」

パキイイイイイ!!

よし!

「リク・ラク ラ・ラック ライラック!

来たれ氷精、闇の精!

闇を従え、吹雪け常夜の吹雪!!

『闇の吹雪』！！！！！！

ギユゴオオオオオオオオ!!

「御主人!上ダ!!!!」

「なにつ!?!」

「なめんじゃねーぞ!鬼門開放、両腕!双撃衝!!!!」

く、避けられんか!

なら・・・

「真つ向から、受け止めてやる!!!!
これが最大出力だ!!!」

先ほどの物とは密度も大きさも桁違いのエクスキューションナーソードが不知火の両腕に襲い掛かる。

「ハアアアアアアアツ!!!!」

力は拮抗していた。
だが・・・

「「紅き焰!!!」」

「「雷の暴風!!!」」

「なっ!?!」

「ああ!?!」

ドゴオオオオオオオオオオオン!

あるうことか私の封印を一時的に解く事に反対していた正義の魔法使いとかほざく奴らが私を狙って攻撃してきた。

「ハハハ! やったぞ、悪の魔法使いである闇の福音を我等正義の力で倒したのだ!」

「おい! 少年大丈夫か!?!」

「相手はあの闇の福音だ。まだ来るかも知れんぞ！」

「さっきの少年を助け出せ！！！」

そんな事を口々に騒ぐ馬鹿の声が聞こえていた。

そこで不思議に思ったんだ。

いくら私が吸血鬼だからと言って回復にも限度がある。

あいつの攻撃を持ちこたえるのに魔力を殆ど使っていたのに『雷の暴風』二発と『紅き焰』三発、それに加えあいつの攻撃の衝撃が来たら流石にボロボロであろうと。

「おい……」

ボキィ！

「グッ、な、なにをするんだ！？」

「なにをするんだ？はあ？マジでそんな事を聞いてんのかあ？

尋常の勝負に余計なチャチャ入れといてそりゃねえーだろーよ……

・

なあ、悪者諸君。」

土煙の中から声がする。

「な！我々は正義の……」

「お前らの正義なんて聞いてねえ！

俺からすりゃ俺がいて、相手がいる。そこで世界は成り立ってんだ！

それを邪魔する奴は悪だろっがよおー！！」

「なにを言うか！そこにいる吸血鬼は悪の」

「お前ら、聞いてねえのかあ？」

土煙が晴れてそこに居たのは・・・

「お前らの正義は聞いてねえ、俺の正義を問うてんだ！

オメエらの正義がどんな御大層なもんかは知らねえし、興味もねえ
！！

そこに居る戦いの相手が世間から見て悪だとかどんな悪行を重ねて
来たとかどうでもいい！

過去なんて些細なもんだ！戦っている時に必要なのは戦っている瞬
間、そこからなる結果！それが正義だ！余計なもんを入れるのは悪
！俺にとってはそれだけだ！！」

そこには傷だらけになりながら叫んでいる奴が居た。

酔狂な奴だと思っただな。

あいつは勝負を穢されまいとして自分から攻撃を止め、飛んできた
魔法を迎撃し、私の魔法の衝撃も受けた。

「もう一度言ってやろう。お前らの正義は俺の正義じゃねえ。

どんなにお前らの正義を叫んだとこで俺の正義は変わらねえ。

それにそんなにお前らの話が理に適ってたってお前らの正義には賛
同しねえぞ？

そこに俺の正義はねえからな。

では、さようなら！！！！」

メキィッ！！！！

「ゴハツ!？」

「……何なんだあいつは」

「ケケケ、変マ奴ダ。」

「お前はなにをしていたんだ。」

「足ガ吹き飛ンダカラコウヤツテ這ツテ来テヤツタンジヤネエーカ」

「ふん、軟弱な奴め。」

「テメエノ作りガ悪イーンダヨ。」

「チツ!なんだここは。馬鹿しかいねえのか。最後まで正義が何だの悪がどーたら言いやがって。」

そして不知火は近づいてきた

「ほら、やるんだったら立て。俺に敗北の二文字は許されねえんだよ。」

「……虫の息でなにを言うか。」

「それでも負けねー。」

「ケケケ、馬鹿ダ。馬鹿ガ居ルゾ!」

「フン……私の負けだ。」

「ん？いいのかそれで。」

「こちらから仕掛けておいて情けをかけられ、しかも虫の息の奴相手に戦って勝つなんぞ誇りが許さん。」

「へえ、馬鹿ばかりじゃないみたいだな。まあそんな事気にされ無いても俺は勝つがな！」

「なんか性格変わってないか？」

・
・
・
・
・

「まあその後話をしていたら意外と気があつてな。」

「へえー。惚れたの？」

「惚れておらんわ！！なにを言い出すかまったく。」

「マスター、心拍数が上昇していますが。」

「ケケケ、耳ガ赤イゼ」

「貴様らわあああ！！！！」

しばらくエヴァンジェリンの家から声が響いていたという。

「そう言えば不知火さん、怪我どうしたの？」

「その後病院に運び込まれたんだが一日寝たら直ったとかいいおつて。」

「え、ホントに？」

「一応見舞いに行つてやろうと病院の前まで行つたら病院の玄関で口論していたからな。
上半身包帯だけで。」

・
・
・

「だーかーらー！治つたつて言つてんでしょっしょー」

「全治一ヶ月はかかる大怪我だったんですよ!？」

「つーかこの包帯邪魔。」

「ああ!とつてはいけ・・・ま・・・せん・・・」

「そういう事で、俺、行くんで!

ん?おーい!エヴァンジェリン!!ちょっと案内してくれよ!」

「・・・なにしてるんだお前は」

• • •

「不知火さんって人間？」

「私は同じ吸血鬼とかそこらじゃないかと睨んでいる。」

「俺は人間だ!!!」

「とーちゃん、急に叫ぶと危ないで？」

「ん？おお、すまん。」

お汁粉作っている二人でしたー。

最強は戦う。(後書き)

次回予告

「今回はエヴァが襲ってきて病院送りにされた後、俺がなにをしていたかお送りしますー」

「・・・マスター」

「・・・エヴァ」

「・・・御主人」

「悪かったと思ってるからその微妙な目を止めんか!!」

最強の過去

side 不知火

「はぁ、疲れた。」

「とーちゃん……………なにやつとるんや?」

「んー?本の整理。いやーめんどくせえな。」

そう言いながら俺は伸びをする。

すると伸ばした腕が高く積まれた本に当たりグラリとゆれる。

「あ、コタ。あぶねー」

「へ?つてギヤ……………!?」

気になる本があったのか屈んでいたコタは本が倒れてくるのに気が付かず押しつぶされてしまった。

「…………大丈夫か?」

「大丈夫ちゃうわ!!!何でこんなに積み上げてんねん!もっと考えようや。」

そう言いながら服の埃をパンパンと払いながら本を持っているのに気が付いた。

「ん?その本は……………」

「床に落ちてたんや。」

「んー？あ、これね。」

これは俺が前に麻帆良きた時の写真集だな。
いやー、懐かしい？」

「いや俺に聞かんでくれん？」

ふーん、おっこれ高畑センサーやろ、もう一人はなにやってんや？」

「この時は確かエヴァと修行のためと称して罨に掛けたりしたんだよ。」

「ああ、だから木に逆さでぶら下がるってるんか。」

ん？こっちは……」

「俺が迷子保護してとりあえず学園長室行ったんだが妖怪学園長に驚いて泣いちゃってな、その時の写真。」

俺たちはいろんな写真を指差していく。

「ん？これは何や？」

「あーあー、これはこれは懐かしい。」

んー、まだこの学園に居るのかな？調べりゃわかるけど……」

「何の話や？」

コタが頭の上に？マークを出して首をかしげている。

「ふむ、じゃあ思い出話と行こうか？」

これは四年前。麻帆良に来たことの話なんだがなー」

そして俺は四年前のことを話すのだった。

side???

「ツクシユン！」

「どうしたんですか？二人とも」

黒髪の女の子と赤い髪のツインテールの女の子が小さな男の子に話しかけられている。

「うー、誰かが噂してるのかな？」

「いや、違つと思つけど」

「風邪ですか？ちゃんと暖かくしないと」

「もー、あんたはまじめねー」

解つてるわよそのくらい。」

不釣合いな三人組はそのまま歩いていった。

side 不知火

「四年前、俺はエヴァンジェリンに病院送りにされ一日で退院した。」

「なんか行き成り話についていけないんやけど。」

「その後高畑せんせーに案内してもらえなかった所をエヴァに案内してもらって、その次の日は知り合いの幽霊とあちこちブラブラしていた。」

「ここまででは特出して持ち出すような話は無かったが・・・」

「とーちゃん、色々と話すべきことあるとおもっんやけど？」

「何で病院送りにされた相手と一緒に町回ってるんや？」

「それに幽霊と知り合いつてなんや？」

「その写真は三日目のことだな・・・」

「え、あ、回想入るんか!？」

「俺の疑問は無視!？」

・
・
・
・
・
はあ、やっぱ無理に治し過ぎたかなー？
ちよつと傷が有った所が痛い・・・

「・・・ん？」

何か遠くで爆発音が聞こえた。

・・・あつちは、あれだ。なんか知らんがロボットとか色々作つてるところ。

「ん〜。嫌な予感しかしねーよー。どうしよう。

行ったほうが良いのだろうか・・・でもなんか未来で厄介なことになるような予感が。

でもやっぱり困ってる人はほっとけないしなー。でも・・・」

そう言いつつ俺は音のした方に歩を向けるのだった。

「で、なにがどーなってんだ？」

なんか変な巨大な機械（ロボット？）が暴走してる。

「・・・あれ、壊していいのかな？つーかさつさと止めないと誰か怪我してもおかしくなくね？・・・あれ、これフラグ？」

「おい！ロボットの前に子供が！！！！」

・・・ですよねー。

「今度から発言には気を使おう・・・」

ゴシヤアアアアアアアアアアアッ！

と言う音と共にすごい速度で進んでいるロボット。

そして転んでしまっている小さい女の子二人。

「よいしょっどー！」

俺の行動はシンプル。

ロボットの前に瞬動して、手に少量の気を宿し……

「はいごめんねー。真波！」

ポヒュッ！

「……止まった？」

周りに居る誰かがそんな事を呟いた。

いや、止まったって言うか。止めたって言うか、壊したって言うのか……

パツと見は外傷なし、まあ実際壊したのは中身だけだし。

これで俺が不思議パワーを使ったとも悟られず万事OKと言う事なのですよ。

「ふいー、大丈夫？お嬢ちゃんたち。」

「お嬢ちゃんじゃない。」

「助けてくれてありがとなー。」

……なんか正反対の子達だな。

ポワポワなんか放って置くと読解ってそんな子と、表情に乏しいクールな子。

「うーん、まあとりあえずハッーターンでもどうぞ」

「……」

「ありがとー。」

・・・ふむ、ツインテールの子やっぱ暗いなあ。

「それ。」

そう思っていると俺の背後を指さした。

何かと思い背後を確かめると・・・

「わー、黒い煙が出てるー。爆発フラグやーん。しかも同じようなロボットがわんさか来てるよコンチキショウ！」

そう言うや否や少女達を両脇に抱えて振り向きざまにダッシュした。

ここで訂正しておくが俺はロリコンでは（ry

「あははは〜 早い早い〜」

「……………（モグモグ）」

「肝っ玉据わってやがりますねえ、最近の子は」

ハッ　ーターンのんきに食いやがって・・・

「ねえ」

「へ？なんだ。」

「前からも来てる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ちやんと掴まっておきましようね
」

俺は横に倒れるようにして路地に入り込む。

ロボットは狭くて入ってこれなかったのか何処かへ行った。

「・・・・はあ、怖い。なにここ。こんな所にいつか来なきゃならん
のか・・・・」

お嬢ちゃんたち、気をつけるんだよ、じゃあね」

さて、学園長とタカミチせんせーの所行って報告を

ズルツ！ガンツ！！！！

「いでえええええ！？な、ちよちよちよ！おま、人が歩き出してる
ところにズボンの裾持って足払ったりしちや駄目でしょ！？」

「「まだ名前聞いてない（へん）」

「あゝ？じゃあ剣ちゃんで。」

「名前じゃない。」

「長いから良いんだよーそれでー。どこの外国人だよってくらい長
いんだよ〜。」

それじゃねー」

ドグシャッ！！！！

「・・・・・・・・だからなんで俺の足を払うの？ズボンを掴むの？いくら

俺が頑丈だからって痛いんだよ?」

「御礼してない」

変な所で律儀なのはいいけど俺は少し痛い思いしかしてないんだが・

「あゝ、じゃあ俺いつか解らないけどまた麻帆良に来るんだ。そんな時仲良くしてくれてるといいな」。

「いつ来るの?」

「何年後か?」

「覚えられへんよー」

俺はここから逃げたいから覚えられないであろうことを言ったんだが……
ってそんな怪しむような目で見ないでくれ、俺の狙いに気づいてる
じゃねーか。

「あーあー、解った解った。

じゃあ写真撮るからそれ持つといて。ほらこっち来て。」

パシヤッ

・
・
・

「そんな訳なんだよ」

「ふーん、その子達には会ったんか？」

「いいや？つーかコタ、俺に用事でもあつたんじゃないのか？」

「ああ、店の看板届いてるで？」

「・・・店の看板？頼んだ覚えが微塵も無いんだが。」

「これもついとつた。」

「手紙？」

『こちらの独断で店名を決めさせてもらったぞい。
孫娘の恩人殿へ』

孫娘？あの妖怪に孫なんて・・・あああの人詠春さんの義父だったな。

・・・詠春さんの子供！？え、麻帆良に居るの！
とりあえず看板を見ようか

『和菓子・洋菓子屋 剣ちゃん』

ふむ、まあ良いんだが。

あのチビっ子ちゃん達のどっちかが詠春さんの娘で・・・妖怪の孫？
・・・まあ小さいことは気にしないことにするか！

「まあ菓子はできてるし早速看板上げて客呼びしてみるかー。
ってそう言えば餡子足りないかも。買ってきてくれ〜」

「解った。」

「いやいや、学校行けんのは残念だが、これはこれで楽しそうだな。
俺は看板を設置し店の中に入る。」

「さて、お客さんは入るのかな・・・」

「って、開けたばかりでそんな都合よく・・・」

『あれ、こんなところにお菓子屋さん？』

『そう言えばおじいちゃんが美味しい店ができるってゆーとった。』

『そうだ、僕がおごりますよ。お世話になってるし美味しいもの食
べた方が風邪も治りますよ！』

「・・・やべえ、少年の声は知らんが少女の声の方なんか聞き覚え
あるぞ。」

あの時誓ったのに、発言には気をつけようって。

ガチャッ

「・・・いらっしやい。お譲ちゃん方」

「」

「どうしたんですか？二人とも。お知り合いですか？」

「あああああああああ……！」

このあと、色々とめんどくさい事になり拳句の果てには初の客に奢ると言うんだかよく解らない展開になったのは割愛させていただきます。

まあ、あんなに楽しく話したのは久しぶりだったと言うのもまた別の話と言

最強は再開する。(前書き)

今回はグデグデ&短いです。
もう色々といごめんなさい。

最強は再開する。

side 不知火

やーやー皆さんご機嫌いかが？

俺はと言つとあんまり良くはないね、なぜなら・・・

「さあ、聞かせてもらおうか。3年前に私達の前から姿を消した理由を・・・」

銃口を額に付けられているからですよ。

「あのね、アルカナ嬢ちゃんよー。」

バキユン！！

「今は龍宮だよ。」

「あつぶつね〜！龍宮嬢ちゃん、冗談でも冗談じゃなくても額に銃口突きつけて撃つたら死ぬと思うんだが・・・そこんことどーよ？」

「死んでないんだから良いじゃないか。相変わらずの反射神経だよ。それともう嬢ちゃんをつけないでくれないか？」

嫌だねー。初日でなんとなくだけでも知り合いがたくさん居るってのは解ってたけど。

まさかこの子が居るなんて誰が予想しましょうか。嬢ちゃんをつけないって言うのもお断りの方向で

「ふむ、失礼なことを考えているね？もう一発逝っておくかい？」

「ふはは〜、遠慮しとくよ。字が違う気もするしねー」

「とーちゃん。これどこ置いておけばいいんや?」

と、コタの声

「ああ、それは鍋の横にでも置いておいてくれ〜、さて……あの嬢ちゃん?」

「なんですかそのどす黒いオーラは」

「フフ、フフフ、私を置いてしかも子持ち。とんだ御身分じゃないか……」

「おーい、多大な認識の差異が発生してるような気がしてならないんだが〜」

「相手は?どこの誰だ?あいつか!アンナか!?ギルドに居た時妙に仲が良かったあいつか!?!」

「は〜い、落ち着こうか?」

俺は龍宮嬢ちゃんの頭に手を置き適当にクシヤクシヤとかき回す。

「はい、さっきの声は何歳ぐらいの子供の声でしたか?」

「……10歳くらい?」

「俺の年齢は?」

「20位じゃないのか？」

.....

「あれ、俺年教えてなかったっけ？」

「聞こうとするたびに戦闘に巻き込まれて聞けなかったからな。」

「まあいいや。俺は16歳お解り頂けたか？」

「6歳くらいの時に子供を作ったと!？」

「はい、何故思考回路がそっち行っちゃうかなー？」

俺のガキじゃないってことを知らせたかったんだが？」

「本当か？」

「俺はそんな軟派な男じゃないし。」

旅の途中で拾ったわけだよ」

ふう、謎が解けたからこれで帰ってくれるだ」ズガンッ!!

「で、当初の質問の答えが返ってきていないんだが？」

「ですよね。つか俺はそもそも旅をしてたんだから別におかしなくね？」

「いや、そう言う問題じゃない。問題なのは黙っていつの間にか居なくなっただことだ!」

「いや、移動途中になんか困ってる人たちが居てフラフラとそっちに行つて助けてたはぐれちゃつてそのまま成り行きでその人たちについて行つた……って言うありましたけど、その殺気からして怒ってるねー？」

「当たり前だろう。あなたが居ればコウキは……」

「その反応からして、逝つたんか。アイツは……惜しい奴を亡くしたな。」

あゝあゝ、こういう湿っぽいの大嫌いなによー。

……それに、そんな悲しそうな顔すんだつたら話さなけりゃ良いもんを

「はあ、餡蜜。好きだったよな？作つてやる。俺のおごりだ。」

「……フツ、うれしいね。あなたの餡蜜は絶品だからな。」

うむうむ、美少女は総じて笑顔が映えるね。

「む？なんか良い事を考えていたろう。チョット言ってみてくれ」

「餡蜜で釣られるとかガキンチョだな、ってね」

ズガン！！ガン！！！！

「店内での発砲はご遠慮くださいお嬢さん……」

「お嬢さんと呼ばなければ考えてやるうじゃないか……」

「はあ、防弾ガラスとかに変えるか」

「なぜお嬢さんと呼ばないと言う選択肢が出ないんだ!!」

「はっはっは、何の事やらね。」

「・・・まあ久しぶりに会えて、生きていることも解った事だし良しとしようじゃないか。」

そう言うと俺が出した餡蜜を黙々と食べあまり言葉を交わさずに帰っていった。

しかし、まああのウキウキした背中はまだ来るな・・・はあ

そして数十分後・・・

ガチャ

「へーい、らっしゃーい・・・」

これまた懐かしい顔が出てきますねー？

「・・・」

こちらの無表情でいらっしゃる女の子。

さっき話した龍宮と行動を別にした理由。つまりは困っていた人、名前はザジ。

「いやー、久しぶり久しぶり。

チヨット見ない間にでかくなったな？」

「・・・」

「そんな悲しそうに怒らないでくれよ。
俺は旅の身だったんだからお前とずっと行動を共にしている訳にも
行かなかったんだって。」

「・・・・・・・・・・」

「え？姉さんが怒ってた？・・・それはチョット怖いな。今度会う
ときはアイツが気にいてた菓子でも作っていか。」

「・・・・・・・・・・」

「久しぶりに食べたい？おう、前に御汁粉また食べたいって言って
たよな？」

「作ってやるよ。」

「・・・・・・・・・・」

「ハハハ、面白い事言っな。」

「・・・・・・・・父ちゃん。何話してるんや？」

「ん？聞いていれば解るだろう？」

「いや、何も言ってへんように見えるから聞いてるんやけど？」

なんだかな、ザジはギャグセンスの塊なのに・・・
このギャグがわからんとは勿体無い。

「・・・・・・・・・・」

「む？今日は用事があるから御汁粉はまた次回？
おう、最高のもん作ってまってるよ。」

「・・・」

「おう、じゃあなー」

「結局一言も喋ってへんようにしか見えへん・・・」

ちゃんと喋ってるのに何故理解できんのだろうか？

「・・・は？行数稼ぎ？台詞が思いつかない？作者のギャグセンス
が無いからザジの面白さを書けないからサボっただけ？
意味が解らんない！」

む、次のお客だ。さて、接客だ。

「・・・そう言えば目的である刹那とまだ会ってないな。
明日にでも探しに行くか！」

最強は探す。(前書き)

遅くなつてすいません。
更新です。

最強は探す。

side 刹那

………シロ君。

今あなたは何処に居るんでしょうか。

もしかして私のことを忘れて……いる……かも………

「せつちゃん、どうしたん？なんか暗いえ。部活で怪我でもしたん？」

「い、いえ、ただ勝手に自分で考えていて傷ついたと言うか………」

「……？なんかよー解らんけど元氣出して。」

そや！この間アスナと行った美味しいお菓子屋さんがあるんよ。そこに今日行ってみたいへん？」

たまにはそう言う事も良いか……

「はい、ご一緒させていただきます」

「アスナー！一緒に剣ちゃんのとこ行かへん？」

「あゝ、このか。ごめん、今日はちょっと無理だ。刹那さんと楽しんできて。」

「そか、アスナは補習やったな。頑張つてーな？」

そう言えば期末試験

「うう、このカーお土産になんか買っというー」

「解ったから。じゃあねアスナー。」

・・・テストか。私も勉強しなくてはいけないな。

side 不知火

「で、お前さんたちはもうすぐ期末試験じゃないんか？
エヴァ、ザジ、龍宮嬢ちゃん。」

「おい、なぜ私だけ嬢ちゃんをつける!？」

「そりゃああれだ見た目と年齢がかけ離れて・・・」

グシヤ!!

「レディの年齢を話題に出すのはどつかと思っぞ?」

「・・・(コクコク)」

だからって顔に行き成りグーパンはねーだろ。

「で、実際のところどうなんよ?」

「マスターとザジさんと私は大体500位以下。龍宮さんは400位台をキープしています。」

「それって何人中？」

「女子中等部2年生の総生徒数737名です。」

「茶々丸、余計なことは言わんで良い。」

「おいおい、お前らが500以下とかありえんだろ。本気出してねーな？」

「ふん、もう15年もやってきたんだそのくらいは許されてしかるべきだ。」

「・・・ザジは？」

「・・・」

「お前はなー、勉強もちゃんとやれよ。つーか龍宮嬢ちゃん。お前知らん顔で餡蜜食べてんじゃねーよ。お前だって良くは無いじゃねーか。」

「いいじゃないか、良くは無くても悪くは無いんだから。」

「お前らなー？」

はあ、こりゃあのポーズも苦勞するよな。可愛そつに・・・

数日前・・・

ガチャ・・・

「ん？いらっしやー、お？あの時アスナ譲ちゃんとか譲ちゃん
の二人と居たポーズじゃないか。」

「あ、こんにちは。ネギ・スプリングフィールドと言います。」

「硬くなるなよ。どうしたんだ今日は。」

「いえ、あの、頭を働かせるには甘いものが良いって言うから、こ
こは美味しかったし・・・」

「お、うれしい事言ってくれるな。まあ座れよ。」

カウンター席に座ってもらう

「・・・どうした。元気がないな？」

「いえ、ちよつと色々あります。」

「ふーん、ちよつと話してみろよ。」

・
・
・
・

そこで簡単に話を聞いたから事情は知っているわけだが・・・
あの爺さんも面倒なことを・・・
どれ、ちよつと協力してやろう。

「お前ら、上位300取れなきゃ1ヶ月この店出入り禁止にしてみようか?」

ビクウツ!?

「な、なん・・・だと・・・」

「そ、そんな非情な選択を迫れと言っのかい!?あなたは!」

「・・・!」

おう!?なんかすごい食いつきようだ・・・
冗談半分だったのに

「お前らほぼ毎日来てるじゃねーか。少しは自重しろ自重を。」

「くっ、葉花もいつも来ているだろう!」

「茶々丸ちゃん?」

俺は茶々丸ちゃんに問いかける様に話しかける。

「葉花さんは上位10位にはいつも入っています。」

「そうか、あ、茶々丸ちゃんは別に来ても良いよ?」

「あ、はい」

「差別だ!」「・・・!」

「うるせーうるせー、ほらほら、今日は店じまいだ。予定があるんだよ。」

勉強して来い上位250位取れるようにな」

「さらりと上がったぞ!？」

テンション高いね、あー面白い。

もうこの時間は学校が終わってるだろうからな、だからこいつらも居るんだろうし。

刹那は元気にしてんのかねえ？

アイツが言ってるお嬢様と仲直りもしたのかな・・・

ん？お嬢様って詠春さんの娘さん・・・って事はあの譲ちゃんの二人組みのどつちかがお嬢様？

・・・まあいいやあ。細かいこたあー気にしないー。

「おーい、コター!俺出かけるからなー、お前も出る時は戸締りぢやんとしろよ?」

「おーう」

いーい、返事だ。

「よし、ちよつくら行きませうかねえ。まああの爺さんに聞けばすぐなんだろうけど、まあ散歩がてらという事で、うーん、剣道場でも見に行くかな」

鼻歌交じりに俺はフラフラと歩いていくのだった。

side 刹那

お譲さまと一緒に話に聞いていたお菓子屋？に来た。
しかし……

「あれ、コタ君？今日はお休みなん？」

「あゝ、とーちゃんはさっき出かけて行ったんや」

「えゝ、そうなんかー。ごめんなーせつちゃん。」

「いえ、誘って頂けただけでもうれしいです。」

少し残念だけれど、また次の機会でも……あ

「すいませんお嬢様。剣道場に竹刀を忘れてしまったので取ってきます！」

「へ？竹刀ってそれじゃないん？」

「あ、いえ、これは木刀で……」

真剣なんて言える訳が無い……

「ちょっと失礼します！」

「あ！せつちゃん！！！」

とりあえず今日は夜に警備の仕事があるから竹刀を取ったらそのまま仕事に行こう。

side 不知火

「へえー、デカイ道場だなー」

「ん？見学か！」

「え？あ、いや・・・」

「いやー、最近の中武研の部長が強くて微妙に勢いなくなってる
とこだったんだよ！」

見学者大歓迎！経験者か？経験者なら一試合やるっじゃないか！」

「あ、ちよつ！」

・
・
・
・
・
・

「これで満足かー？俺人探しに来てんだよ。」

死屍累々、死んでないが。

そんな言葉が一番合いそうな状況が展開されていた。

「ぐ、だ、誰を探しているんだ・・・」

「剣道部に桜咲っているか？」

「桜咲？居るけど今日は帰ったぞ？」

「げえ、タイミングわりー。ま、良いやー、ジジイのどこでも行って教えてもらうか。」

伸びをしてその場を立ち去ろうとする不知火。

「ちょっと待ってくれ！あんだ、名前は！！」

「剣ちゃんとも呼んでくれい。」

こちらを振り向かず手を振りながら歩いていってしまうのだった。

side 刹那

死屍累々・・・

「あ、あのく、どうしたんですか？」

「恐ろしく強い奴が来てな。桜咲と知り合いだって言っていたけど・・・」

恐ろしく強い？

・・・???

「いえ、思い当たりませんが」

「そうなのか？まあ、学園に居るんだらうからその内会つたろ。で、どうしたんだ？」

「忘れ物を取りに来ただけですので、失礼します。」

それにしても、誰だったんだろうか？
そう考えていた時電話がなった。

「龍宮か？」

『刹那、私は今日の夜の警備は休ませて貰う。人生の一大事なんだ』
いつも冷静な龍宮がこんなに慌てているのは初めてかもしれない。

「解った。学園長には私から報告しておく。」

『恩に着る。』

今日はいろんな事が起こるな・・・

side 不知火

「刹那の居場所を教えてもいいがその代わり今日刹那と一緒に夜警の仕事をしるだあ？」

「そうじゃ、いつも一緒に組んでいる仲間が用事があって来れなくなったらしいのでな。」

「うわあ、めんどくせえな。自分で探した方が良い様な気がしてきた。」

「つーか危険なのか？その夜警の仕事ってのは」

「ふむ、実はついさつき学園結界に魔力が感知されてのお。
少し厄介な事になるかもしれんのじゃ。」

めんどくさい匂いがプンプンしてるな……

「観測された魔力の大きさから見て上位の悪魔、それが三体まった
く別の方角から来ているのじゃ。高畑君ともう一人、その悪魔と戦
闘が可能な魔法先生を配置したんじゃが刹那君の方向に一体向かっ
ておるんじゃ。はつきり言って今の刹那君では相手取る事は難しい。
行ってくれんかのぉ？」

そこまで言われて行かない奴が居たら俺はそいつをぶん殴るだろう
なー。

「はあ、解りましたよー。さくつと倒しちゃえばいいんでしょ？
あーあー、めんどくさい。」

「ふおつふおつふお、頼もしいのお。」

side悪魔・A

今回の召喚者は随分と気前がいいのだな。

爵位持ちではないとは言え我々を【2体】同時に召喚するとは……

「残念だが、ここから先は通行止めだ。」

「む……」

「上級悪魔、報告通りか。まあ、倒しちゃえば上級とかそんなもん関係ないけど……」

「……甘く見るなよ、人間。貴様にそうまで言われるほど落ちぶれてはおらんぞ。」

「そついい私は構えを取る。」

「ははは、良いの良いの。気にスンナ。どうせお前はすぐに還る。」

「な……」

「なんだ、その技は……」

「さあ？ナンでしょうか。答えはお前には理解できんよ。」

最後に自分が見たものは、憎らしい笑みを浮かべた男と天を覆わんばかりのやい……

side悪魔・B

西の悪魔の本能が消えた？

「君のお仲間は倒されたようだよ？」

そこに居たのは白い髪にメガネを掛けている男。そう簡単に倒されるはずが無いのだが……

「お前は私を倒すのか？」

「君がこれ以上進もうとするならね。」

「私の意志では決められんなのでな。押し通らせてもら・・・っ！
？」

ドゴオオオオオオオン！！

攻撃しようと腕を上げてても一向に体が動かない。

「不意打ちのようで悪いが、これも仕事なんだ。」

「くくく、問題ない。本命はここや西ではない。北だ。」

二度目の轟音が響く時、私の意識は途切れた。

side 悪魔・C

「くっ、雷鳴剣！！」

「娘、貴様じゃオレには勝てん。」

光る剣を片手で受け止め、右手で少女を吹き飛ばす。

「ぐっ！？がはっ！！」

少女から意識が抜け落ちる、そして私は止めを刺す。

「死ね！」

左手に魔力を籠め、指先に集める。

「串刺しだ!」

ドスッ!

「・・・む」

「あーあー、無理しちゃって。勝てなさそうだったらとりあえず逃げりゃ良いもんを・・・
死んじゃ意味ないっつうのによー!」

私の指は岩に刺さっており、少女はいつの間にか現れた少年と共に私の背後に居た。

「何者だ。」

「んー?名前か。いやいや、いらねえだろ。今から戦うんだ。そこに名前は必要か?」

「ふん、貴様も正義とやらのために戦うのか?」

そう私が問いかけるとゆっくりと少年は振り向く。

「お前が言う正義が何かは知らないが、少なくとも俺は傷つけられた刹那のために戦う。
それが理由だ。」

背筋に悪寒が走る。

薄い笑みを浮かべた顔に似合わない凍るような眼光……

「さあ、来いよ。一撃の下に沈めてやろう。

お前に与えうる最高の手向けだ。」

「ふ、フハハハハ！ やつとだ、小娘如きには大きすぎたがお前にならば良いだろう。

この力、見せてやろう。そこらに居る魔族達とは違うという所を！
「！」

私は『枷』を外す。

「あゝ？ 爵位持ちって奴か？ 俺は良くその区分分けを知らんが……何であろうと俺は負けん。生涯無敗、それが掟だ。」

「ほざいている！ 永久石化属性付属、悪魔突き！」

人間の少年は動かない。私が目の前に来ようとも……

「鬼門、全開放。」

剣上院流、奥義、滅・一閃」

私はそこに……鬼神を見た……

side 刹那

暖かい……そして、懐かしい。

なんだろうか、とても安心する。
でも、起きないと、早く起きないと後悔する様な気がする。

「ん……」

「あゝ、起きたか？」

この、間延びした喋り方は……

「お久ー、刹那。」

「し、シロ……くん……」

「なんだ？幽霊見たような顔して。別に死んでないぞ？俺」

夢じゃない、全身が痛いし。

シロくんが目の……前に……

「ん？どうした……っておい！？なんで泣くし！

お、おいー？刹那、ちょ、俺なんかしたか！？」

「シロくん……！！……！！」

「え……うおっ……！？」

感極まって抱きついてしまう。

「本当に……シロくんだ……
会いたかった……」

「……怖かったんだな。」

「だけどなー刹那。周りの目を気にしてもらえると助かるだが」

「……周りの目？」

「ほわー、せつちゃん大胆やなー」

「いいなあ、刹那さん。好きな人にあんなふうに出て来て。高畑先生にそんなこと出来ない……」

「フ、フフフ、す、少し心配して来たらこれか……」
刹那、後で沢山 O H A N A S I I しようじゃないか。」

「え、あ……」

ふらっ、パタンッ

「刹那！？どうした！」

その後何が有ったかまったく覚えてなく、翌朝に龍宮やこのちゃん達に質問攻めにされたのはまた別の話。

最強の隠し事。(前書き)

久しぶりの投稿、
亀更新ですいません。

最強の隠し事。

side 不知火

「じゃあ父ちゃん行ってくる!」

「おう、行ってらっしゃい。夕方までには帰って来いよ」

さて、刹那との再開から少しの時間がたった

「ふう、今日も一日頑張るか。」

そう意気込むと店にお客が入ってきた。

「んあ?あゝ、高畑せんせーじゃーないっすか。」

「やあ、この間は大活躍ご苦労様。」

「俺はなんもしてないっすよ」

「ハハハ、実はね。僕が相手取った悪魔が君たちの居る方に主戦力を送ったと言う発言をしていたんだよ。」

「……めんどくせえ、これがばれたらあのジジイに仕事を増やされる。」

「へえ、他のところに行ったんじゃないですか?その主戦力って言うのは

俺は見えてませんよ〜?」

「・・・そうか。そう言うことしておくよ。」

さっすが大人の男、話がわかるねえ。

「で、今日はどうしたんですか?」

「ん? ああ、さっきまで出張でね。ちよつと海外の方まで行って帰つて来た所なんだよ。」

それで旅の疲れをお菓子でとろつかなくてね?」

「はいよ〜、お安い御用〜。」

和菓子洋菓子飲茶にアイス、色々とあるよー。」

「じゃあ大福を貰うよ。」

「あいよ〜。」

「そう言えばね? 出張先で面白い噂を聞いたんだよ。」

「へえ、なんですか?」

「この間行ったところは拳闘大会とか闘技大会とかがやっている所だったんだけど。」

「っ!・・・そうなんですかあ〜」

「それでね、今から2年前くらいにもの凄い強い剣士がふらつと来て簡単に優勝したらしいんだ。その大会に出ていたのは全員強者と

言われた人ばかりだったらしいよ。」

「ほ、ほぁ・・・で?」

ヤバイ、ばれているのか?ばれているのか!?

「その剣士の特徴が狗族の少年を連れた日本の剣士だったらしいんだ。」

「珍しいモンですねえ」

「地元の酒場で歴代の優勝者の写真が飾ってあってね?それを見てきたりもしたんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヤベエ、完全にばれてる。汗が凄い・・・

「通り名が出来てて『剣神』とか『幻想剣』とか呼ばれているんだけどね?」

「何が言いたいんっすか?」

「ハハハ、ただの世間話さ。大丈夫だよ。学園長には話さないから。」

「・・・ありがとうございます」

「おっと、じゃあそろそろ用事があるから行くよ。」

「おつかれっす。またのお越しをー・・・ふう」

ああ、遂にばれた・・・まあ、過ぎたことは仕方ないか！

そう言えば無事に試験も終わったらしいし。

今日が終業式って言ってたかな？

来年度先生になるってネギ少年喜んでたな。

・・・ん？そう言えばコタとネギ君会ったことねーよな。

同い年だし仲良くできると思うんだが

「まあ、いずれ縁があれば会っただろ。」

俺は一息つこうと椅子に座ろうとしたら・・・

カランカラン

「・・・お早にお越しで。

学校どうした学校」

エヴァが店に入ってきた。

「ふん、もう終わって試験の打ち上げとやらで騒いでる。

それでな相談だが、一戦交えないか？最近鈍ってしょうがない。」

「え~~~~~

~~~~~

い」

「・・・良く息が続くな。まあいい。家で待っているぞ。来なかった場合。まあ月夜には気をつけるがいい。」

「・・・また、面倒なことになりました。」

「まあ、後々まで続くのも面倒だしな、いくか。」

・  
・  
・  
・  
・

「まあ、来たは良いけど。なに？4対1ですか？」

「ここはエヴァの別荘、目の前にはエヴァ一家。」

「エヴァ、チャチャゼロ、茶々丸ちゃん、葉花ちゃんである。」

「ふん、良いではないか。あの日から順調に強くなっているのであれば別に大丈夫だろう?。」

「あら、随分と高評価で・・・。」

「そう言いながら剣を抜く。」

「ほお、今回は剣を抜くのか・・・。」

「まあそもそも剣士だしねえ？それに葉花ちゃんと茶々丸ちゃん、強いでしょ?。」

「いやあ、そんなことはないですよ／＼」

「・・・顔赤いけど大丈夫？」

「大丈夫です／＼」

ふむ、やっぱり変わった子だ。

「じゃあ、始めようか。どっからでもかかってこーい」

「ふん余裕だな！氷神の戦鎚！」

ズパンツ！！

「ふっふん、強者の余裕って奴だ。」

sideエヴァンジェリン

・・・本当に滅茶苦茶だな。

あんな雨露でも払うように軽く振っただけでアレを斬るとは・・・

「茶々丸、チャチャゼロ！詠唱に入る、援護しろ！葉花はアレを使え！」

リク・ラク ラ・ラック ライラック来たれ氷精、闇の精！」

「闇の吹雪とか言っちゃつか・・・」

覚えているのか。というか茶々丸が撃っている銃弾を全て切り裂く

とは本格的になんなんだお前は。

「よっし、いつくよ！斬月！！」

「え、何それ……」

葉花から飛んでいく斬撃はまっすぐに不知火に飛んでいく、しかし

「剣上院流、音断！」

あっさりと斬り裂かれる。その一瞬音が無いようにさえ感じた。なるほど、音断か。覚えておこつ。

「うっそ、斬月の斬撃斬るなんて。」

「闇を従え、吹雪け常夜の吹雪！！『闇の吹雪』！！！！！」

よし、このタイミングならば避けられまい！！

「剣上院流、天叫紅！」

叫び声のような音を上げ紅い光線が私の闇の吹雪に当たる。

「ククク、拮抗している間に攻撃を受けたらどうかな？」

「あゝ、それは遠慮したいかな？」

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば  
空 槍打つ音色が虚城に満ちる 破道の六十三！雷吼炮！！！！」



「あゝ？気合で直した。」

「・・・気合と一番縁が無いお前が何を言うか。」

「ねえ、エヴァ本当に不知火さんって人間？」

「ケケケ、化物ダロ」

「ありゃ、ひどい言い方だなー。俺は人間だよ（たぶん）ボソッ」

「おい、今自分で多分って言っただろ」

「まーまー、気にすんなよ。そろそろ、決着つけようか？」

そう言うと、不知火の空気が変わった。

「剣上院流、決戦奥義・・・」

「な!？」

「何とかして防いでね？」

ゴウッ!!

side 不知火

「真にスイマセンでした・・・」

「謝って済む問題か？これが……」

「はい、ちょっとテンション上がって周りが見えてませんでした」

「まったく見えていなかったよな？」

俺は今土下座しています。

なぜかと言っと、俺が放った技でエヴァの別荘が半壊してしまったのです。

「……直すのに膨大な時間がかかるな」

「本当にスイマセンでした。」

「膨大な費用が要るかもな」

「……ハア、用意させていただきまますよ。くそ、手痛い出費になりそうだな……」

「膨大な労力もかかる。」

「……なんなんだ、要求は！血か！血なのか！？」

「ほお、物分りが良いじゃないか。」

「……俺はこれから生きていけるんだろうか？」

「ストックも採るから軽く1？くらい逝つとくか？」

「いや、流石にきついですエヴァ先生。」

ホントに生きていけるんだろうか!?

「あの、大丈夫ですか?」

・・・

「エヴァ、茶々丸ちゃん家にくれない?」

「やらん!」

「そ、そんな・・・わたつ、私なんかが・・・/ / /」

「え、茶々丸だけずるーい。ねえねえ、不知火さん。私は?」

「ん?別に来たいんだつたら来ても良いよ?」

「え!あ、えつと・・・」

また顔が赤くなってる・・・  
そう言う体質なのかな?

「・・・お前、意外と厄介な性格してるよな」

「ケケケ、マツタクダゼ。」

「え!俺なんかした!?!」

**最強の隠し事。(後書き)**

葉花の転生者能力が出てきました。  
パツと思いついただけです……

## 最強のお節介

side 不知火

良い天気だ。清々しいまでの快晴だ。だがしかし・・・

「ネギ少年。何故にそんなに落ち込んだるんだ？」

「うう・・・グスツ」

まあ、十中八九・・・いや九十エヴァの仕業なんだろうなあ

自分で言ってたし、ぼーやに協力はするなって・・・

でもエヴァも大人気ねえな。こんなチビツ子相手にエヴァと茶々丸ちゃんと葉花ちゃん三人がかりって・・・

そりゃ心も折れるよなあ・・・

すまない少年。俺は何かと協力できないんだ・・・

今も別件で忙しいし、エヴァ怖いし。

「まあ、何で悩んでるのは解らないが。息抜きにいつでも来てくれて良いよ。」

ただでさえ大変なんだろうからさあ

「は、はい。ありがとうございます」

「あと、君はまだまだガキンチョなんだから。ちゃんと誰かに相談しなよ？」

一人で抱え込むなんて大人でもきついモンがあるからなあ。

まあ、俺も大人って訳じゃないけど・・・む、いや、前の年齢を足

せば……………」

「えっと?」

「あ、いや、コツチの話コツチの話。まあ、何はともあれ、だ。ガンバレ少年、ただ決して下は見るな、前だけを見据える、男は気合だ!」

うつひゃー、クセエ。

自分で言ってるんだけど、なんかむずかゆく成るような台詞だ。

「はい!」

「……良い表情だ」

まあ、良いとするか。

これで一人救われたって言うんだったら。

「あの、ありがとうございます!」

「ああ、さっきも言ったけど。いつでもおいで」

……行ったかな?

さて、俺は俺で頑張らなくちゃな

・  
・  
・

夜

メンテナンスが良く解らんが麻帆良全体が停電している。  
その中で俺は3-Aの教室に居た。

「はあ、出来た。流石に疲れたなあ。さて、と」

そう言い、俺は立ち上がり……

「おーい、さよ！起きろ〜！」

「ひゃ、ひゃいいいいい！ね、寝てません！寝てませんよお！？」

「いや、夜だから寝てても良いんだけど……

む、幽霊は夜行性なのか？だったら寝ちゃダメだ」

「し、不知火さんですか。なんだ、びっくりさせないでくださいよ」

「はいはい、ごめんねえ。それで、出来たわけだが……決めるのはお前だ。

これを実行するのは辛い事とかもあるだろう。

もう一度言う、お前以外には決められない事だ」

「はい。もう決めたんです。一人は、嫌ですから……」

決意をした目、揺ぎ無い真直ぐな目だ。

「うん、合格だ。じゃあ、いよいよ明日だな」

「はい！」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

sideエヴァンジェリン

「え、皆さん。今日から新しいクラスメイトが来ます。仲良くしてくださいね？」

一気に沸きあがる教室。

(……今日はあの幽霊は居ないのか)

私にとってはいつも居る筈の幽霊がいつもの席に居なかったのですねが少し気がかりになった。

「マスター、どうかなさいましたか？」

「いや、なんでもない」

「では、入ってきてください」

教室の扉が開かれて、そこに居たのは・・・

「なっ！？ゆ、幽「ムガゴツ」！？」

「エヴァ、それはナイシヨの方向で」

「し、不知火！？」

慌てて私は振り向くが、そこには不知火は居なかった。

改めてその少女の方を見てみる・・・あきらかにあの席に座っていた幽霊だ。

車椅子に乗っているが・・・間違いない。

「・・・・・・・・それを押している不知火はいつの間そこに居たんだ？」

「どうかしましたか？」

「くっ、いや、なんでもない・・・・・・・・」

あとで死ぬほど問い詰めてやる・・・

side 不知火

おおっと？なんか背筋がゾクゾクウっとしたな・・・  
帰りは急いで帰って店を閉めてシャッター閉めてさっさと寝るか。

「では、自己紹介を」

「は、はい！え、えっと、相坂さよです。よろしく願いします！」

「えーと、せっかくなので質問を・・・」

「はいは～～～い！それは私の出番だね！」

テンション高く前に躍り出たのは麻帆良のパパラッチこと朝倉和美  
だった。

「まず質問！さよちゃんはどこから来たの？」

「え、えっと・・・」

「京都からだ」

小声でさよに囁く。

「あ、京都です」

「へ～、じゃあこのかと桜咲さんと同じなんだ」

そういつて朝倉和美は同意を求めるように振り返る。

「……って、どうしたのアスナ、このか、桜咲さん、龍宮さん、  
エヴァンジェリンさんに葉花と茶々丸さん、あとザジちゃん……」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

う、ううくん、視線が痛いなあ……  
さっさとこっから逃げたいよ。

「う、うん……」

じゃ、じゃあ、車椅子に乗ってるのは何で？」

「え、えつと、まだ歩きなれてなくて……」

「歩きなれてない？」

「こいつ体が弱くてなあ。あんまり歩かなくて長距離歩くのは無理なんだ」

まあ、実際は体の感覚に慣れてないから歩けないだけなんだが……

「そうなんだ。困った時には言っただけ？」

「あ、はい……」

あゝあゝ、すっかりあいつらの視線に萎縮しちゃってるよ……

「じゃ、もう一つ質問。この男の人はだれ？」

「おとー s ムグッ」

「兄だ。それ以外認めない。つーかそれを言ってしまうと色々取り返しが付かない気がする。家の中でだったらまだ許容範囲内だが外では絶対ダメだ！つーかコタだけでも色々とアウトなんだ。これ以上は無理だ。いいな？」

「は、はい・・・えつと兄です」

「へえ、そうなんだ。じゃあ相坂さん？」

「いや、血の繋がりは無いんでな。俺は剣上院不知火だ。

もしもさよの事で困ったことがあったら菓子屋の剣ちゃんつてところに連れてきてくれ。  
そこが家だから」

「えーあの絶品お菓子のお店！？今度取材させてくださいよ」

「んー、ま、別に良いか。じゃあ今日以外ならいつでも来てくれていいよ。」

さて、ネギ少年。俺はもう行くから。それはもう目にも留まらぬ速さで脱兎如く帰るから。

さよ、帰りはコタが迎えに来るから。じゃあな」

「」「」  
「」  
「」

「あ、ちよつと！？エヴァジェリンさんに龍宮さんにアスナさん！  
？これから授業ですよ！」

「ハッハッハ、ネギちゃん。私達にはやらなきゃいけない事がある

わけよ  
「

「へ？葉花さん……」

「じゃね！」

「ああ！？葉花さんまで……！」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「ただいまです」

「とーちゃん、ただいまー！」

玄関が空いて二人が帰ってきた。

「おう、お帰り。さよ、どうだった？学校は」

「はい！楽しかったです！！」

溢れんばかりの笑顔で返してきた。

「よかったな。いやいや、ホントに良かった。修学旅行に間に合っ  
て……」

「へ？修学旅行……」

「そうだ。コタ、俺たちも京都へ行くぞ。準備しろよ？」

「おう！いやー久しぶりやなあ」

さて、何もおこらないといいなー。

## 最強は子煩悩？

side 不知火

さて、今日の前にはメツチャクソ不機嫌なエヴァが居る。  
エヴァ、お前の覇気で客が逃げていくぞ？営業妨害だ。

「どうした、エヴァ。可愛い顔が台無しだぞ？」

「ふん、世辞はいい。相坂さよについてだ」

「企業秘密だ。まあ言うなれば体の基盤だけ作ってそれに取り付けた  
け気を注ぎ込みさよがその体に取り付いたんだがな。

まだ体で動くの慣れてないから立ったり歩いたりできないみたいだ  
けど」

神様への願い事を一つ使ったのは秘密だ。

「だからその体の基盤の製造方法は何だと言っておるんだ！」

「だから企業秘密だって言ってるんだろ！」

「……まあ良い」

あり？……妙にあっさり引き下がるな？

「小太郎とさよに聞いたが、京都に行くそうだな？」

「ああ、ちょうど修学旅行がそっちだっけ聞いたからな。」

「コタとさよの紹介と俺も最近帰ってなかったから顔見せとかねえーとな」

そうなるも金から二人をまもらにやいかんな・・・

「・・・まあいい。一つだけ忠告だ」

「ん？なんだよ」

「私達の、3-Aの副担任、祭崎 翔には気をつける。奴は・・・最初からいけ好かん奴だと思っていたが・・・想像以上の曲者だ」

・・・エヴァにここまで言わせるか。

「なにかあったのか？」

「この間、ぼーやとやり合ったことは言ったな？」

「ああ、ネギ少年はすつごく暗かったな」

「・・・それは置いておくとしてだ。

私は葉花と茶々丸を連れていたのだがな。ぼーやも人を2人連れて来たのだ」

「2人？話からして片方は副担だろ。もう一人は？」

「神楽坂アスナだ。あいつ、ただの中学生じゃなかった」

「ふーん、アスナ嬢ちゃんがねえ？」

で、お前が注意しろとか言うんだからなんかあったんだろ？」

そう聞くとエヴァは怒りに身を震わせ・・・

「アイツ、私に・・・」

「ん？なんだって」

「私に知覚されないスピードで、私に猫耳を着けおつたのだ!!!」

「・・・はあ？」

「・・・えー、なにそれこわい。  
よくそんな度胸あるな」。

「で？」

「いや、その後すぐに修羅と化した葉花がポッコボコのギッタギタにしておつたが・・・」

「で、何で注意しろと？」

「・・・相坂を若干いやらしい目で見ていてな」

「へえ、別に良いんじゃないかな？さよ、可愛いし・・・」

「いいと思うならその殺気と気の流出を止めて剣をしまえ」

俺の目の黒い内はさよに手は出させん・・・

「エヴァ、その副担が凶行を起こしそうだったら迷わずコロセ」

「ふん、親バカめ」

「お前、茶々丸ちゃんが男連れてきたらどう思う？」

「まあ、2、3発殴るだろうな。それぐらい耐える奴でなくては茶々丸はやらん」

「お前も大概親バカだ」

「………そうだな」

自分達の過保護具合を改めて認識しつつ、俺はエヴァに新作の菓子を出す。

「ドラ焼きだ。定番だが磐石だろ？色々と試行錯誤した結果の一品だ。

感想聞かせてくれ。なんだったらそのレシピ茶々丸ちゃんに渡すから」

「ふむ、いただくとしよう」

「はい、召し上がれ……ありゃ、高畑センサー。いらっしやいセンサーもこれ食べますか？」

高畑センサーが店に入ってきた。

「ハハハ、いただくよ。

お邪魔しようとしたらまじめな話をしているようで入り辛かったんだ。

何の話をしていたんだい？」

俺は新作ドラ焼きを出しながら質問してみた。

「・・・高畑センサーはアスナ嬢ちゃんが男連れてきたらどうします?」

「まあ、とりあえず居合い拳が飛ぶね」

「良かったなエヴァ。親バカは俺達だけじゃなかったぞ?」

「まあ、案外タカミチはそう言うタイプだろうな」

「ああ、なんだい。そう言う話か。」

となると、不知火君は相坂君でエヴァは絡繰君かい?」

「そうそう。いやあ、子煩悩って度が過ぎんのはイカンと思うんですけどねえ」

「まあ、そう簡単には割り切れないよね」

「どちらにせよ茶々丸が出て行くことは殆ど無いと思うがな。」

有るとすれば・・・おい、不知火。茶々丸を人間に近づけることは可能なのか?」

「出来んこともないが・・・厳しいな。」

俺の気が足りない。こないだのさよの一件で俺の気は今少なめなんだよ。

まあ、全快まであと1、2週間位つてとこだな」

そう、あの儀式は俺の気をくっつきと持っていくのだ。

「ふむ、そうか・・・」

何を考えているのかわからないがエヴァは黙ってしまった。  
その時、店のドアが開いた。

「いらっしやーい。む、さよか。お帰り」

「はい！ただいまです」

うん、良い返事だ。

さて、さよの車椅子押してきてくれたのは・・・

「友達か？えっと・・・」

「あ、朝倉和美です」

「さよを送ってくれたのか。ありがとう、今日は取材かな？これ新作だけど食べていくか？」

「え！ホントですか!？」

「ああ、遠慮せずに食べてくれ。どうせ客はちよつとの間来ないだろうから。」

エヴァのせいで

「何故私のせいになる!？」

「お前のイライラパワーが外にまで漏れ出てたから客が寄りなくな

「ったんだよ」

「……………フンッ！」

「あゝあゝ、またむくれちゃって。また客が遠ざかる。」

「で、どうだ？新作の味は」

「む、悪くない」

「ああ、凄く美味しいと思うよ」

「美味しいです」

「おお、凄い高評価。新メニューけってー」

「パチパチパチ、と自分で拍手する。」

「……………あれ。そう言えばコタどこ行ったんだ？」

「あ、小太郎君ならいつものところですよ」

「さよが答えてくれる。」

「そう言えば、小太郎はよく出かけているが何処に言っているのだ？」

「エヴァが新作のドラ焼きを頬張りながら聞いてくる。」

「ん？裏山に修行って言って出かけてるけどな。  
・・・そう言えば、何してるかは見たことがないなあ。  
一体何してるんだか・・・  
でも、まあ、こないだ戦った時は強くなってたなあ」

「「親バカ・・・」」

「なんだあ？今の何処が親バカってんだ？あん？」

「顔がにやけてたぞ」

「ウキウキしたオーラが滲み出ていたね」

そんな事無いさ。

・・・無い、よな？

side 小太郎

俺はとーちゃんに少しでも近づくために修行してる。

最初は裏山の辺りで一人で修行しとったんやけど、修行の途中に変な奴に出くわしたんや。

「楓ねーちゃん、来たで？」

「おお、小太郎か。待っていたでござるよ」

楓ねーちゃん、なんや忍者みたいなカツコに忍者みたいな口調やけど忍者じゃないらしい。

「で、どうだったでござるか？父上殿との決闘は」

「……手も足も出されへんかった」

「ふむ、今の小太郎でも手も足も出ないでござるか……拙者も手合わせ願いたいでござるな」

「つーか、一步もその場から動かずにデコピンだけで倒された……」

「……んー、もうちょつと修行してからでござるな」

くっそ〜、早くとーちゃんに追いついてやる！

「そう言えば小太郎、来週は修行が出来ないのでござる。すまぬな」

「ん？大丈夫や。とーちゃんの実家に俺も行くことになったから」

「では拙者も準備があるゆえ。軽く流して終わる出でござるよ」

「おうー！」

side 不知火

「では私は用事があるので帰るとしよつ」

「……エヴァ、幾ら早く準備しても修学旅行は早まらないぞ？」

「っ!?!?・・・私を何処まで子ども扱いする気だ?」

「最初の明らかに凶星を突かれたような反応は見なかった事にしよう」

「う、うるさいわ!!--!」

顔を赤くしながらエヴァが出て行った。

「さて、僕もそろそろ行くところかな。まだ仕事終わった訳じゃないし」

「はいよ、また来てくださーい」

そういつて高畑せんせいも出て行く。  
いやあ、皆忙しいんだねえ・・・

「あ、そういえばさよ。お前は修学旅行の準備で足りんものとか無いのか?」

「えっと、服が若干足りません」

そう言えば服も最低限必要な制服とある程度の服しか用意してなかったからなあ・・・

「あ、じゃあさよ。一緒に買い物行くところよ!!--!」

「え、でも・・・」

「いいよ、行っというです」

ちよつと待つてる？財布こないだ買ったからそれ持ってけ。

金は心配せんでも大丈夫だ。

でも、無駄使いすんなよ？まあ、飲みモンとかちよつとつまむモンくらいなら別にいいがな」

「はい！」

「さよのこと、よろしく頼むよ。和美ちゃん」

「はい。じゃ、行こっか。さよ」

「行って来ます！」

「いってらっしや〜い」

「・・・俺も準備しなくちゃなあ。

まあ、実家に帰るだけだし別に持ちものつつつても財布と剣位かなあ？

まあ、エヴァに散々言いつつも自分が一番楽しみにしているかも知れないと思う今日この頃であった。

最強は子煩悩？（後書き）

次回は序盤に言っていたあつた不知火の誕生会。刹那パートの予感？

**番外編「白翼の少女と思い人の誕生会」(前書き)**

予告どおりの番外編。

短いですが、読んでみてください。

## 番外編「白翼の少女と思い人の誕生日会」

side 刹那

ついに、ついにこの時が迫ってきた。

そう、うちの、えっと・・・あの・・・す、好きな人の誕生日／／／

だ、だから誕生日プレゼントを決めなあかん！  
まずは師匠に相談や

「ん？男の子へのプレゼント？

・・・ああ、そう言えば剣上院の子息の誕生日やったな。  
なんや、惚れてるんか？」

「ひゃえ！？い、ち、違います！そ、そうだけど、そんなんじやなくって・・・」

そう慌てて返すと師匠はニヤリと笑って答えてくれた。

「そうやなあ。布団の中にも潜り込んでけばいいんちゃう？」

「そ、そんな事できません／／／／／」

「初心やなあ。ふん、よお解らへんけど。いつでも身に着ける様なもんがいいんちゃう？」

稽古の邪魔にならないようなもんとかで

「・・・いつでも身に着けられて稽古の邪魔にならない」

うん、考えとこ。

よし、次はシロ君のことをよく知ってそんな人に聞こう。

・  
・  
・

剣上院家厨房

・  
・  
・

「むう？ボンの好きなもん？

・・・ハッピーーーンじゃのー！」

「ああ、ハッピーーーンだな・・・」

「・・・ハッピーーーン？」

「まあ、坊ちゃんも菓子とか甘いもんが好きやから菓子とかいいかも知しれへんな」

「お菓子・・・」

・・・お菓子、作ったこと無いなあ。

「それはそうと、嬢ちゃん。ちよっとこっち来てみい」

「・・・？はい」

金さんに呼ばれたのでそっちに行ってみる。

「これ、売れ残りだから嬢ちゃんにやるわ。気に入ると思うで？」

そう言つて封筒を渡された。

・・・なんだろう？

「金！手伝つてくれえい」

「はいよ！じゃあな、嬢ちゃん」

「あ、はい。ありがとうございます。

・・・なんなんやろ？この封筒」

開けてみて、中を見てみると・・・

「はう！？／／／／」

金秘蔵不知火隠し撮り写真、？108927、湯上り不知火。時価1〜2万円で取引された一品である。

まあ、要するに一話のとき金が言っていた写真である。

「あ、あうう／／／／

つ、次！次は泉さんや！」

赤面しつつも大事そうにその写真は懐にしまって、駆けていくのであった。

剣上院家本家守護三人衆の家

・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・

「おお、刹那嬢ちゃん。こんにちは」

「こんにちはは、えっと。シロ君にお菓子プレゼントしたいんですけど……」

「お菓子？」

「若もすみに置けへんなあ。手作りのお菓子プレゼントされるなんて……」  
「ええよ、ちよっと待つとき。確か本があった筈やから……」

しかし、刹那は解らない。なぜなら漢字が読めないなのでこの本の危険性について知らなかったからだ。

「『これでイチコロ……！』……れる……が……け……ける？」

泉さん。これなんて……」

『おい、泉！どこだあ！！テメエ道場の予算確認表、これ計算間違



なんか本を見せた途端満面の笑みになったのはどうしてやるか？  
まあ、ええや！がんばってシロ君にお菓子をあげるんや。

「おばさん。これの材料多くないですか？」

本にはこさじ？3杯と書いてあるけれどもう20杯くらい入れてる・

・・・

えっと

『門外不出・剣上院家特製、超強力痺れ薬！人体に5杯以上使うべからず』

・・・なんて読むんやろか？

「大丈夫大丈夫。不知火だったら普通の人が2、3日動けなくなるくらいでやっとなんか効き目が出るから」

「????」

「ふふふ、知らなくても大丈夫よ」

side out

・  
・  
・  
・  
・  
・

side 三人称

そして、誕生日当日。

阿鼻叫喚な誕生日会が開かれた訳です。

そして、ある日の不知火家……

「ん？刹那、なに作ってんだ？」

「あ、えつと。昔の誕生日の時のことを思い出したからクッキーを焼こうと思って……」

「え………」

「……どうかしたんですか？」

そう言っつて笑顔で首をちょこんと傾げる刹那。

「……なんでもない、楽しみに待つとるよ。」

「はい！」

「ハハハ………」

そう言っつて台所から離れていく不知火。

「………あんな顔されたら。断れないやろ？」

なんやねん、あぁ〜もお〜……

くそ、喋り方が素に戻った。

「……まあ、とりあえず解毒剤用意しておくか」

16歳、何かを悟った一瞬だった。

番外編「白翼の少女と思い人の誕生会」(後書き)

真の黒幕が発覚！

実は金と泉はまだ罪が軽い方だったという事実！

微笑む母親！

以来、思い出としてクッキーは不知火以外には作らないが、クッキーのレシピは金の本通りに作ると言う不知火にとっての悲劇！！

・・・まあ、不知火だし大丈夫でしょう。

**最強は帰郷する(前書き)**

投稿です。

やっと修学旅行・・・先は長い・・・

## 最強は帰郷する

side 不知火

おはようございます、不知火です。

はてさて、この間の休みの時に刹那特製クッキーを食べて未だに若干左手に違和感がある不知火です。

さて、今日は遂に京都へ帰ることになったんですが……

「……さよにエヴァ、こんなに早く出ても出発時刻は変わらへんで?」

「ぐ……そんな事解っておるわ!!」

「マスターは昨日は夜もお休みになられず寝不足です」

「エヴァってばビミョーなところ子供なんだからあ」

「余計なことは言わんでいい!」

「えへへ……私も楽しみで眠れませんでした」

はい、皆さん。俺の時計を見てください。

俺の目がおかしくなければまだ3時なんですよ?  
辺りはまだ暗いし……

「しかも何故に俺の家の前で勢ぞろいしとるんや……」

くそお、眠くて口調を標準語に直す気力も起こらん……

「・・・お父さんが珍しく方言で喋ってます」

「眠いんや。仕方あらへんやろ？ふあ〜」

「ほお、確かにレアだ。おい、茶々丸」

「大丈夫ですマスター。既に音声記録、映像記録共にしております」

「茶々丸、あとで聞かせてね？」

「ケケケ、朝カラ元気ダナ。テメエーラ」

「おう、ゼロ。お前も行くんか？」

「オウ、才前モ面白イコトニナツテンナ」

「・・・そうやな。俺、眠いから寝るわ。店の中だったら居てもいいから静かにしてるよ」

・  
・  
・

2時間後

・  
・  
・

「・・・ゼロ。あいつらは？」

「ケケケ、始発デサツサト行キヤガツタゼ」

始発か。まあ、エヴァは15年間、さよに至っては60年間外に出てなかったんだし、まあ、仕方ないといえば仕方ないのかなあ？

「まあ、いいや。俺もボチボチ行くとしよう……この場合ゼロも連れて行ったほうがいいのか？」

「ケケケ、当タリ前ダロ」

「……ですよね」

俺みたいなのが人形連れて歩くとか……ま、気にせんがな。

「よし、コタ準備できたか？」

「おう、OKや」

・ ・ ・

大宮駅

・ ・ ・

「おう、さすが麻帆良の学生。テンションが段違いで何処に居るのかすぐに解るな」

キヤーキヤーとテンションが高い集団がこちらからも伺える。

「よし、ゼロ。エヴァがこっから見えるからお前を引き渡すぞ」

「・・・引キ渡スト言ツテオイテ何デ俺ノ頭掴ンデ振りカブツテヤガル」

「行ってらっしやいゼロ！」

「ヤッパリカ!？」

綺麗な放物線を描きエヴァの頭にチャチャゼロが着地する。  
エヴァは驚いてこちらを見てめっちゃ睨んで居るが・・・  
まあ、気にしない。

しかし、まあ、なんだ。

パツと見ただけでも超人集団だよねえ  
今のチャチャゼロ投げは意外とスピード速かったから気付かれない  
と思っただけど・・・

刹那と龍宮嬢ちゃんは場所が悪かったな。

気付いたのはさよにエヴァ、ザジと・・・

「あれ、なんや。楓姉ちゃんやんか」

「む、小太郎か。では御主が話しに聞き及ぶ小太郎の父上だったでござるか・・・」

そうか、さよ殿の兄上が・・・」

「ん〜、その話つてのがよく解らんけど多分そうじゃないかなあ  
それと好戦的な目でさよを見るのはやめようか？」

「さよは戦えない事も無いけどまだ見ての通りちゃんと歩けないから」

「さよ姉ちゃん戦えるんか!？」

「あれ、コタに言つてなかったっけ？」

「そう、俺が作り出したさよの体は身体能力がめちゃくちゃ凄いこと  
になっているのだあ！」

「あと幽霊時代の名残がよく解らんがポルターガイストみたいなこと  
出来るし。」

「うん、頑張れば戦えそうだよな？」

「まあ、さよが望めばの話だ。それより良いのかあ？  
もう電車に乗り始めてるぞ？」

「うん!？」

「よく解らん驚き方をして走り去って行った。」

「ふ〜む、まあ、一応用心はした方が良さそうだろ〜な……………  
あいつらの乗ってる車両に護符付けとこつと」

side 祭崎

「……………妙な力の流れが、きのせいかな？」

まあいい。俺が近く出来ない様な術者なんて殆ど居ないだろうし。しかし・・・有明があそこまで強かったとは・・・いや、あんまり反撃はしなかったけど。未だに傷口が・・・

さて、それは置いておいて。

待ちに待った修学旅行だ。危険視すべきはフェイト位だが。こっちには転生者二人に最強の悪の魔法使い、そこまで被害が及ぶことは無いはずだ。

・・・しかし、あつちではカードゲームをやって居るのに、一向にカエルが出てくる気配が無いな・・・何故だ？

「翔先生！そのツバメ捕まえてくださいいっく！！！」

「おっと、つてあれ？」

・・・カエルが出てきてないのにツバメが先？

まあいい。つて、考えてたらツバメを見逃してしまった！？

「うわあああ！まてえ！！！」

「くそ、油断しまくってた！」

とにかく追いかけては・・・

・・・え？

そして思わず立ち止まってしまふ。

「・・・ん、どうかしましたか？」

「とーちゃん！もう一回や！！勝ち逃げはゆるさへん！！」

「お前は静かにしてる。すいませんね？」

「あ、いや。こちらこそすいません。

人違いだったようです・・・」

ありえない、人違いな訳がない。

あの学ラン、黒髪の犬耳・・・

犬上小太郎だ。

何故だ？何故居る？こいつも敵なのか？原作キャラではない・・・  
そもそも小太郎の父親は死んでいるはずだ。

・・・転生者？だったら用心しないといけない。

それか、俺や有明がこの世界に入ったことでの原作からの乖離によ  
って出てきた人間？

・・・いや、今はよそう。もし敵でもここで襲ってくる事は無いはずだ。

「では失礼します」

「はい。

コタ、お前も懲りないなあ？もう15回目だぞ？」

「とーちゃんが強すぎるんや！！」

「知らん、勝負はいつでも全力でかかるんだ」

・・・なんか、気が抜ける人だ。

おっと、それよりも早く追わなくちゃな。

・  
・  
・

「気をつけた方がいいですね、先生。

特に・・・向こうに着いてからはね

・・・それでは」

「あ、どうもご親切に・・・

「おっと」

「・・・どうも」

・・・ピリピリしてるな。

やっぱり近衛の身の安全が心配なんだろうなあ。

って、オコジヨがやっぱり要らんこと吹き込んでるし・・・  
止めといた方がいいよな・・・

side 刹那

・・・はあ、もうすぐ京都だ。

どうしよう、やっぱりお嬢様のお屋敷には挨拶に行った方がいいの  
だろうか。

剣上院本家にも行っておきたい所だけ・・・

いや、別に二親への挨拶とかそういう意味じゃなくて、その、あの……

「よう刹那。なに顔赤くしてんだ？」

「いや、これはですね。シロ君の家へ挨拶に行つてほつがいか考えてい……し、シロ君？」

な、何故……

「よつす、別に挨拶とか堅苦しいことはしなくてもいいと思つけどなあ。

まあ、遊びに来るつてんなら別に気にしなくても良いと思つが……どうかしたか？」

「な、なんでここに居るんですか!？」

「む? いやー、久々に実家に帰ろつと思つてだな。

そしたらちようど3・Aも修学旅行で京都行つて言つじゃねーか。こりゃちようど良いと思つてさよとコタの紹介をと思つてな。

「うーか、良いのか? もうクラスの奴ら降りる準備してるっぽいぞ?」

「へ? あ! ……また後で会いましょう」

「ああ、基本的に俺らはお前達と同じルートでゆつくり帰るからさ。困つたことあつたら声かけてくれ。

……ああ、あと多分俺が帰るつて言つて置いたから町中に剣上院家縁のモンがいるだろつからそいつらに協力要請しても良いと思つ

ぞ？

じゃ、俺たちは先に行くから。コタ行くぞ」

「じゃあな、刹那のねーちゃん」

・・・まあ、でも。

剣上院家が協力してくれるんだつたら大丈夫そうだな。

side 不知火

「いやあ、清水寺。よく飛び降りたなあ・・・」

「とーちゃん、それは懐かしんで出てくる言葉やないで？」

「いやいや、意外と行けるモンなんだよ。ちょっと高い紐無しバンジーだと思えば・・・」

「紐無しバンジーは一般人がやったら死ぬで？」

「・・・それもそうだな」

我ながら馬鹿な会話しているな・・・

いや、だって見慣れてて全然新鮮味が無いんだよなあ  
最初見て懐かしいと思ったけどそれほどでもなかったし・・・

「ん〜、どうするかなあ。見た所妨害も悪戯程度だしな・・・  
今日は家に帰るかなあ」

・・・ん？

振り向くとそこには白い少女が居た。

髪が白く、服も白い和服、何より人形のように透明な目をした・・・

「ふうむ、この修学旅行。荒れそうだな」

「父ちゃん、どうしたんや？

「・・・いや、なんでもない。

さて、念話でもして刹那に帰ること伝えるか。

厄介なことになりそうだし。本腰入れて警戒する必要ありそうだな

あ。めんどくせえ」

そして、俺たちは剣上院本家へと足を進めるのであった。

**最強は帰郷する（後書き）**

それとなく出てきた少女の正体は!?

・・・まあ、予想はつくでしょうけど

次回、久々の本家三人衆本編登場です。

## 最強は疲れる

side 不知火

外の日は傾き始め、京都は夜になろうとしている頃……

「で、お前ら。反省は？」

「……しています。スイマセンでした。だからこの縄を解いてくださいボン（若）（坊ちゃん）」

「あと1時間したらな」

「……そんな殺生な!？」

え？なに行き成り面白いことになっているのか？

それは俺がここに帰ってきてからの事を話そう……

・  
・  
・

10分前

・  
・  
・

「ここがとーちゃんの家か……デッカいな」

「ああ、デカイのだけは認めよう。  
まあ、中身は古いし住んでんのはバケモンばかりだけどな・・・  
ちよっとここで待ってる」

そう言っつて俺は最速で家の門をくぐる。

「ふっふっふ、久しぶりの金様必殺トラップパレードで若を驚かしたる」

「ボン、面白そうだから協力するわしを許してくれ・・・」

「金さん。この可動式の斧あっちに追いつきやいいんすか？」

「おう、よっし。そろそろ来るやろ・・・」

「ここが地獄の一丁目や！」

剣を抜き。

静かに三人の背後に近づく・・・

「お前等のな！！！！」

「「「な！？ボン（若）（坊ちゃん）！！！！ゲッバファ！」」」

「安心しろ。峰打ちだ」

刀を掲げそう言い捨てる。

「・・・ボン、それは逆刃刀に見えるんじゃないか？」

そうですが何か？

普通の剣の峰であるほうで斬りましたが何か？  
むしろそれが刃の部分であることをあえて否定しませんが何か？  
いや、それが何か？

「若、普通に切れてます、痛いです」

「ぐう、ここで死に絶えるなど・・・無念。

来世はカメラになって、人の不幸を見てみたい・・・ガクッ」

「「~~~~~ん（こんざ~~~~ん）！！！！！」」

「お前らがこんなモンで斬った位で死ぬわきゃねーだろ」

そう言いながら着々とロープをセットし終わる俺。

「あの、若？なぜに俺たちをロープでしばっとるんですか？」

「ボン？老体にはきつい事はあかんぞ？」

「坊ちゃん、ほんとに止めてください」

よし、木の枝に括り付けて、と・・・

「で、お前ら。反省は？」

「「「反省はしていても後悔はしていませんギヤフー！？」」」

思い切りロープを引き上げ逆さまに吊り上げる。

「で、お前ら。反省は？」

そして冒頭文に戻るのである。

・  
・  
・

「おう、おかえり不知火」

「む、親父……なに企んでやがる！」

「久々に親に有ってその態度はないやろ！」

「うるせえ！テメエが俺にただお帰りとか言うはずねえ！！」

「うつさいわ！疲れとんや！厄介な奴が京都に侵攻して来たゆうて警備の強化を進言したのお前やろ！」

「……はあ、まあいい。俺はこないだ話した奴連れてくるから」

こんな奴らを俺としてはこいつ等に会わせたくないんだがな……

・  
・  
・

「こいつが小太郎」

「犬上小太郎や！」

「うつむうつむ、元気な子じゃあないか！」



ハツハツハ、超特急だ！

side 祭崎

「このかさんを返してください！！」

「否、それは出来かねる」

「返せえ、言われて返す人は少ないと思いますえ」

くそ、想像以上に厄介だ。

明らかに片方は転生者……

どんな力を神から貰ったのか解らんが注意しなくちゃならん。

今ここに居るのは……

俺、ネギ君、神楽坂、桜咲

月詠を相手取れるのは俺か桜咲……

しかし、転生者も居るとなると俺はそちらに回った方が良い。

あの眼鏡程度だったらネギ君で十分なはずだ。

だが……

「千草さん、早く終わらせよう。無駄な時間はかけたくない」

「そうやな。やっかいなのが出てきても適わんし……」

フェイト・アーウェルンクスえ……

ラスボスがこんな序盤で出てきてんじゃねえーよ。  
俺がチートって言ってもそんなモンかんけーねーよって位フェイト  
が強いつてことが身にしみて解った。

さつき一瞬近衛を取り返したんだが、背後を取られて殴り飛ばされ  
た。

痛かったね。なんか原作より強くない？

いや、チート貰ってるからって原作キャラより強いつてのは早計過  
ぎるか……

と、成つてくると……

俺VS白い少女&フェイト

桜咲VS月詠

ネギ&神楽坂VS眼鏡

ムリムリムリムリ！あんな奴ら二人相手にしたら俺死んじゃうから！  
だってあの神様、吸血鬼化とか不死とかそう言うチートやってくれ  
なかつたんだもん！

『お前らはアイツを見習うべきなんだよ。自分より他を生かそうと  
するあいつを……』

誰より男の、いいや！漢のアイツを！！！！！！』

アイツって誰だよ！！

って、ふざけてる場合じゃねえ。

「おい、旦那！何とかなんねえのか？旦那の実力ならチヨチヨイと  
……」

「黙れ性欲オコジヨ。相手の力量を見れない奴がゴチャゴチャ言う

んじゃねえ。

少なくともあの奥の少年とあの白い和服少女は俺と同じ、それ以上だ」

「な、じゃあどうするんだよ！」

「知るか！……くつそ、一か八かだ！！ネギ君、君が出来うる最上級の術を唱えるんだ！」

「へ？あ、はい！」

「させると思うか？」

「なっ！？」

目の前には和服の少女が居た。  
速すぎる……

「罪の枝、クロウ・クロウ……」

「っ！くつそお！？」

俺は慌ててネギ君を突き飛ばす。

インヒジブル・ブラック  
「虚空一閃」

死んだ、絶対死んだよ、これ……  
……

あれ、何で生きてんだ？俺……

「ちよいとお兄さん。下がっててくれないか？そこに居ると斬っちゃいそうだ」

「へ？」

その瞬間、背筋に悪寒が走った。

俺は自分でも気がつかないうちに瞬動で数m後ろに下がっていた。

「……主、何者だ」

「答える義理も、答える気も無いんだな。これが。」

剣上院流奥義！『無鏡光』」

「な……」

その人の周りの光が剣に吸い取られるように無くなったように感じた。  
・

「……ありゃ？今の防いじゃう？困ったな」

「ぐ……否、防げていない。私が自分の意思以外で血を出したのは久々だ」

微塵も困った様な感じを覚えさせない口調で言い放ち、それに答える白い少女。

「まあ、当面の目標は確保してるし。どうとでもなるんだけど……」  
「・

当面の、目標を確保？

どう言う意味だ・・・近衛はまだ相手の手中に・・・

「おい、ワリィね！その少年とねえちゃん。俺の知り合いに手を出した自分を恨んでくれ」

その人の横に居る狗族の少年が近衛を抱えている。

そしてその向こうには眼鏡が倒れており、フェイトも遠くに吹き飛ばされている。

「し、シロ君！」

「ん？おう、刹那。ワリィな遅くなった。コタ、このか嬢ちゃん連れて後ろ下がってる」

「え〜！とーちゃん、俺も戦いたいわ」

「うっせえよ。つーか戦わねえし。で、嬢ちゃんたち。まだやるかい？」

・・・一つ言わせてくれ、『無茶苦茶』だ。

side 不知火

あゝ、自信なくす。

鬼門全開放してトップスピードで殴りかかったのに少年に反応されなし・・・

意識刈り取るつもりで放った技防がれるし・・・

あゝ、やだやだ。

「ぐ、ガハア・・・あ、あんさんは・・・」

「ん？なんぞや。俺の顔に見覚えとかあんの？」

「け、剣上院家の次代頭首・・・」

俺はそこまで有名なつもりは無いんだが・・・

大方、金とか金とか金とかのせいだろうけど。

「なんで旅に出てたのがこのタイミングで出てくんねん・・・」

「引き際だね。彼とそっちの男を敵に回すのは今は危険だ」

そっちの男？

ああ、ネギ少年の隣に居る・・・

あれが副担かぁ・・・

「おっと、私情を挟むな俺。クールになれ俺・・・よし、んで？  
どうするよ。」

俺としてはここで降参して大人しく連行される事をお勧めするが？

「いいや、ここは引かせてもらうよ。君についても、調べなくては  
成らなくなったからね」

「行かせるとでも？」

俺は剣を前方に向けて気を集中させる・・・

「私が殿をしよう」

「頼むわ、星はん……」

「剣上院流、奥義……」

む、空間移動って奴か？水の中にドンドン沈んでいく……

「クロウ・クロウ！」

「『剣蒼華』」

剣の動きに鈍い青色の線が華のように咲き誇る。

その青い線は……

「死への境界だ」

「あ……」

む、技が当たる前にギリギリゲートが閉じてしまった。  
残念だ。収穫なしか……

side 星

「……」

「星はん？大丈夫でっか？」

「……フフ、フフフフ」

私が、恐れた。

怖がるのが前世でも決してなかった私が……

戦いの中でも、死ぬ時でもまったくの恐怖を抱かなかった私が……

・  
私が、恐れた……

そして、最後の攻撃……

「フフフ、剣上院家次期党首……覚えておこう」

綺麗だったな。

あの青い光、剣の鋭さ、そして……

「あの眼……フフフフ」

「星はんが壊れた……」

絶対に手に入れて見せよう、あの男……

**最強は疲れる（後書き）**

ちよいと暴走気味です。

感想とかあったらください。

## 最強の心の内は？

side 不知火

「ああ、そう言うわけだから。今日も見張りだ。……ああ解つたよ。次ぎ行く時は刹那とさよも連れてくから、うつせえ親だな。・ああ、あの三バカも今日と巡回させそいてくれ。あいつらなら本命以外だったら戦えるだろ。ん、じゃあ切るぞ？」

バカかあの親どもは……」

「とーちゃん、どうしたんや？」

「いいや、それにしても。まあめんどくさいなあ。ネギ少年は改めて説明しないとなんないっぱいしなあ。・あ、そうだコタ。ちゃんとネギ少年と仲良くしろよ？」

「まあ、考えとくわ」

そう言つて鼻歌交じりに歩いていくコタ。

ふん、昨日色々と楽しそうに話してた奴が何を言つてんだか。

はてさて、昨日の襲撃がありまして周辺を見張っていた俺ですが、まあめんどくさい訳ですよ。

昨日俺が離れてなければもうちょっと違う展開もあつたかも知れなかつたからなあ。  
離れづらい訳よ。

「それにしても、この剣。もうダメだなあ……」

あんな偏狭の土地で売ってた安売りの刀だしなあ。そりゃガタが来てとうぜんかあ。

しかも相手が使ったあの血の刀……あれも厄介だなあ。  
ふむう……」

そう言っただけ俺は地面に手をつける。

すると、その手が沈み込み、一振りの刀を抜き出した。

「……これの使い時かなあ」

黒い色の鞘に金色の龍が彫ってある。

柄の部分も黒い布が巻かれている、つまりは見た感じ真っ黒ということだ。

「……」

その時後ろに気配を感じ取った。

考え事をしてた俺は反射的に後ろに居た奴の首筋に沿うように刃を当ててしまう……

事も無く鞘に入れたまま首筋に添えた。

「……剣士の背後に無闇矢鱈と近づくもんじゃないぞ。

え〜と、楓お嬢ちゃんだったか？」

「……ん〜、お嬢ちゃんと呼ばれたのは初めてでござるなあ」

「ふむ、俺は年下には嬢ちゃんとか少年とか付けるからなあ。例外はコタとさよと刹那だけだな。

つか、良いのか？飯の時間だろうに」

「拙者はもう食べ終わったでござるよ。自由行動まで少々時間も有るので少し気になっていた事を確かめに来たでござる。一手、手合わせ願おう」

「ふむ、まあそれも悪くは無い」

双方共に地面を蹴る！

sideネギ

「なんか屋根の辺りが五月蠅いような・・・？」

「ネギ君、今日ウチの班と見学しよー」

そう叫びながらまき絵さんがこちらに向かって突っ込んできた。

「わーーーーっ!?!」

「ちよっ、まき絵さん！ネギ先生はウチの3班と見学をー」

「あ、何よー私が先に誘ったのにーっ」

「ずるーい、だったら僕の班もー!」

あわわ、ど、どうしよう・・・

「あ・・・あの、ネギ先生!」

あ、宮崎さん……

「よ、よろしければ今日の自由行動、私達と一緒にまわりませんか  
ー!?!?」

「え……」

うーんと、宮崎さんの班だったらこのかさんも刹那さんもアスナさんも居るし……

「わかりました宮崎さん!

今日は僕宮崎さんの5班と回ることにします!」

何もないといいんだけどな!。

その時また一段と大きい音が屋根から響いてきた気がした。  
……なんだろう?

side 楓

「ふむ、その歳でここまでの強さ。生まれ持つての才能と努力の賜物って訳だ」

「くっ、それでもまったく届かないでござるよ……」

大の字に倒れている拙者とその横で座っている不知火殿が居た。

「いやいや、俺は君より2年も修行する期間が会ったんだ。

毎日休まずに、ね。

そのうち追い抜かされるモンだよ、完璧な強さは無い。先があるから強さを求めるんだ。

限界を見てしまったらそこで終わりだぞ？」

「・・・その通りでござるな」

「さうと、俺はネギ君たちの後を着いて行かなきゃなんないんでね。

君も早く行ったほうが良いよ・・・って、あれ？ネギ君もう出発してんのか。

じゃあな！」

そう言い残して不知火殿の姿は掻き消えたように見えた。

「瞬動の『入り』の錬度も桁違いでござるなあ・・・」

自分でも気付かぬうちに手を強く握り締めていた。

「強さの先・・・か」

何かを決意したような、そんな強いまなざしだった。

side 刹那

のどかさん・・・凄いな。

たとえ相手が10歳の少年だとしても、好きな人に気持ちを伝えられるというのは・・・

私は、私は……………

「ふう、やっと追いついた。やっぱり微妙に変わるもんだな、何年か居ないと……………」

「あ、シロくん」

「よう、はあ、疲れた。」

「……………つかもしかして俺って方向音痴か？」

「……………いつもタイミングよく来て、狙ってませんか？」

「どうした、そんなジト目でこっち見て。俺なんかしたか？」

「い、いえ。何でもありません」

まったく……………こちらはいつもドキドキしているけど。

シロ君は、どう思っているんでしょうか？

「で、どうしたんだ？あれ……………」

「ああ、えっと……………」

指をさす方向にはすっかり悩んで目がぐるぐる回っているネギ先生が居た。

「なんと言うか……………のどかさんという生徒が居てですね？その、ネギ先生に告白を……………」

「ふうむ、さっすがネギ少年。まあイケメンだもんなあ。」

「ハハハ、リア充爆死しろ（ボソツ）……」

「……シロ君、なんか言いました？」

「いいや、別に。羨ましいなあと思ってな」

これは、やっぱりシロ君も男な訳で、別に色恋沙汰に興味が無いわけではないと言うことに……

「あ、あの！」

「ん？なんだ」

「や、やっぱりシロ君もそう言う話には興味があるんですか？」

「まあ、そりゃ俺も人間だし男だし？憧れるってのはあるなあ。

だからこそリア充は死んで欲しいな（ボソツ）」

なんかさっきから殺気が漏れ出ているような……気のせいかな？

「ふむ、羨ましいか。ならば私と回るか？不知火」

「エヴァずる〜！はいはい！私も一緒に回りた〜い！〜！」

「美少女お二人に誘われるのは嬉しいが、残念だけど一応仕事でね」

嬉しいんだ……

「どっかから殺気が……」

「・・・お前は鋭い様で鈍いな。で、仕事というのは何だ？  
・・・ああ、ぼーやの件か」

エヴァンジェリンさんが此方を向いてニヤリと笑うと話を続ける。

「そつだよ、つーかお前居るんだつたら協力してやれよ」

「何故そんな面倒くさいこと私がやらねばならんのだ。お前と気に食わんがあ副担任が居れば相当の事が無い限り大丈夫だろう。ぼーやも全く戦えないという事は無いのだからな」

「ん、まあ、あの副担の実力を知らんけどちよつとキツイかなあ？俺はあの白いのと戦わなくちゃいかんだろうし。副担にもう一人の人形君を相手してもらっても、なんか微妙に危なそうと俺の勘が言ってるんだよな・・・」

「お前の勘、か・・・  
絶対にハズレ無さそうぞ嫌だな」

た、確かに

・・・と、言うか

「あ、あの・・・」

「ん？どうした刹那」

「な、仲がよろしいんですね？」

「あゝ、まあ、悪くは無いな」

「クツクツク、心配せずとも取りはしないさ」

「な?!そ、そんなことはっ／＼／」

「取る?何をだ?」

「なんでもないさ。私達に協力を要請したいんだったら血でも用意しておくんだな。」

行くぞ茶々丸、葉花」

「じゃあね、不知火さん」

「失礼します」

「おうう……血かあ。2?位なら何とか……」

「シロ君!?!」

本当にやりそうで怖いです

side 不知火

いやー、本気でどうしようか。刹那にめっちゃ必死で止められたけど……

まだ左手の痺れは取れないし、昨日いつの間につけられていた傷の直りが遅いし。

痺れは明日になれば治るとして。

問題はこの傷……

多分あの真っ白ちゃんだと思うがなあ・・・  
なんで傷治らんのだろう？

「シロ君・・・す、すいませんでした!？」

「む？どうした刹那。入ってくればいいじゃねーか」

「い、いや、だって・・・ふ、服・・・」

ああ、傷見てたから上は着てないけど・・・

別に気にするようなことか？

あ・・・

「ちょうど良いから包帯巻いてくれない？背中届かないし」

「へ？／＼／

いいい、いやいや、えっと・・・あの・・・」

「・・・どうした？」

「や、やります・・・大丈夫、大丈夫、小さい頃にもした事はあ  
る。別に恥かしいことじゃない・・・はう／＼／」

なんかブツブツ呟いてるけど・・・どうかしたのかな？  
まあいいや。

しばらく待つとオドオドした手つきで包帯を巻いてくれる。  
・・・意外と恥かしい絵だなこれ。

「あ、きつくないでしょうか？」

「ん、大丈夫だ・・・そう言えば、何で敬語になってんだお前。麻帆良来てからずっと思ってたんだけど」

「い、いや、あの、癖というか・・・」

「・・・なんか、嫌だな。敬語使うなよ」

「え・・・」

「あゝ、なんつーかな。お前に敬語使われると・・・寂しい？いや、なんか違うな。」

「・・・まあ、なんか違和感があるんだよ」

「・・・」

「・・・どうしたんだ？刹那」

「・・・」

振り返ってみると顔を真っ赤にして気絶している・・・  
俺何かしたか？

「・・・まだ包帯も途中だったのに」

俺は気絶しながらも包帯を固く握り締めている手をどうにか外そうとして、刹那の腕に手をかけ・・・

「不知火さん！！！！」



**最強の心の内は？（後書き）**

今回の話を簡略化するなら。

不知火、デレる！！！！！

ですかね？

え？他にも重要そうな事があった？いや、これより重要なことなんて無いでしょう。

**最強は揺るがない（前書き）**

今回は少し長めです。

## 最強は揺るがない

side 不知火

「ハア……で、ネギ少年。どうしたって言うんだ。あんなに慌てて」

少々息を荒げながら聞いてみる。

「ハアハア……え、えっと、そうだ！これですこれ！！」

そついつてネギ少年は1つの封筒を差し出してきた。

「……果たし状？何じゃこりゃ」

空けて中身を見てみると……

『剣上院流次期党首、剣上院不知火殿  
本日、の刻に古都に在りし決闘の場で待つ』

星

』

「子の刻ってまたなんでこんな表現を……」

「あの一子の刻って何ですか？」

「ん？まあ、まあ真夜中の事だな。0時位だ」

「へえ」

さて、本来なら行くべきじゃないんだろうが・・・  
逃げてでも勝ちじゃねえんだよねあゝ。  
負けちゃ行けねえ流派かあゝ。やっぱり厄介だよねえ・・・

「この決闘の場って言うのは？」

「・・・これはな。剣上院の敷地にある場所なんだよ。まあ、家に帰るしかないか」

「え・・・」

「ああ、大丈夫だ。すぐに戻ってくるさ」

今は10時半か・・・  
早めに出よう。

「じゃあなネギ少年。刹那に話しといてくれ。何かあったらコタにでも言えばあの眼鏡と神鳴流の嬢ちゃん位までなら大方対処できる」

「あ、はい」

さて、迷わないで行けるもんかねえ？

すっかり自分自身でも迷子キャラが確定している不知火であった。

・  
・  
・

・

2時間後

・

「ふう〜、待たせたな」

「・・・逃げたかと思ったぞ」

ふむ、怒ってるっばい・・・

「いやあ、道に迷ってな」

「ふん、まあ良い。結果的にここに居るのだ。始めようか、死合いを・・・」

白い外見に血の赤い剣はよく映える。  
心なしか月までもが白く感じる。

一対の赤い刃

「はあ、死合いとかなんだかねえ。めんどくせえな」

「ああ、そつだ。忘れていた」

「・・・なんだよ」

「これを、使うのを」

星は懐から細い鎖のような物を出した。

すると、それは蛇のようにこちらへ向かって来る。

「っ!?!?な・・・」

水に入るような様子で一気に体内に入る不快感。

心臓の辺りにある違和感・・・

「なんだあ、これは・・・」

「フッフ、心地良い殺気だ。背筋が凍る」

・・・それは頬を赤くしてウツトリとしながら言っ台詞じゃない

「で、これは何なんだ」

「これは魂引綱と言ってね。貴重かつ、危険な魔法具だ。

その効果は!」

星と名乗っている真っ白ちゃんが自分の胸から伸びる鎖を一気に引く

「ぐっ、おお!?!?」

一気に引っ張られる。

そして、腹に一発、拳が入った。

「ぐっ、ガア？」

なんだ？おかしい。こんなもんで俺の体にダメージが通るはずが・

「気や魔力を封ずる。リスクは3つ、自分の気も封じなくてはいけない点と」

また蹴りを入れられて距離が開く。

しかし鎖は健在。星はその鎖を持ち地面に叩きつける。

「間合いは絶対的に制限される。まあしかし、私のこの剣に間合いはないと言っても過言ではないからな。それはいい。

最後に、解除方法。発動させた人間に従うか、『どちらかが死ぬか』だ。

しかしこの状態で私に勝つことは不可能だぞ？

お得意の鬼門開放とやらもできまい。そうでなくとも剣上院流は気に頼る技が大半を占めているんだからな」

おや？なにやらこれってピンチじゃないかい？

「フッフ、私の物になるか、死ぬか。二者択一だ」

「・・・俺の選択肢は一つだ」

「？」

「俺が勝つ。それ一点！」

「フフフフ、フハハハハハ！馬鹿か、否、それでこそだ。来い！！」  
「後悔させてやるよ」

黒い剣を抜く。

抜いた刀身も黒、どちらが刃か、峰か。そもそも本当にそれは刃なのか。

斬られた者にしか解らない。

『黒刀・夕闇』

それがこの刀の名前。

すべてから拒絶された、何かが欠けた刀。

「……行くぞ！」

side 祭崎

朝倉の一軒があつた後、多少は回復したネギ君が前に居て、せつせと式神の紙に名前を書いている。

……失敗したやつは後で破っておくか。

「ネギ君、あの、え〜と……不知火さん？だっけか。はどこいったんだ？」

「えっと、決闘に行きました」

「……決闘？」

「はい、昨日の白い人が直接渡しに来たんです。ビックリしたけど今は決闘以外興味がないって言うてすぐに行っちゃいましたけど」

「普通そんなもん行くか!？」

「畏とか考えないの!？」

「……バトルジャンキー？」

あの強さなら負けることはないかも知れないが、ここで戦力を失う可能性を鑑みれば……  
やっぱり様子を見に行くか。

「ネギ君、不知火さんはどこに行ったんだ？」

「えっと……」

「私が、案内します」

「む、桜咲？」

振り向くとそこには桜咲が……

「って、なんかすごい顔色が悪いぞ!？」

「い、いや、気にしないでください。それより早く、早くシロ君の  
ところへ行かんと……」

「……なんか口調安定してないぞ?」

「早くしないと、いや、シロ君が負けるとかそういうことは考えて  
ませんが、万が一ということが」

「・・・なんか俺の桜咲と近衛ハーレム計画破綻っぽくね？  
なんか軽く失恋した感じだよ・・・」

「ま、まあ、とにかく案内してくれ」

「・・・あのー、祭崎先生。桜咲さん行っちゃいましたよ？」

「って早い!？」

急いで追いかける俺だった。

side 星

予想外だ。もう決闘が始まって2時間迫ろうというのに・・・

「圧倒的不利の状況でここまで耐えるか」

「ゴホッ、やっべ、血とか吐いたの超久しぶりだ」

「・・・決闘をはじめる前より元気になっていないか？」

気を封じられてなお驚異的な身体能力。

「いやあ、ただテンションが上がってるだけだ。体のあちこち痛いのは認める。」

でも、まあ解ってきた、お前のこと。

お前さんのその武器は自分の血液から作り出してる、その血液の分量を考えればお前も体でもリーチは長くて6、7m位。

で、その重さはほぼ無いと言っても良い。身体能力は若干あなたの方が上。

俺が勝ってる部分をあげれば、腕力と脚力、あとは剣の熟練度。

あとお互い気は使えないが俺の技は殆ど気が使えないと成立しない、対してあなたは気を使わないほうが主流・・・それになんかまだ動きに違和感があるからたぶん隠し持っている能力がある。

うむ、意外とピンチだな」

頭も悪くない。

そして自分でピンチと言っておきながらあの落ち着き様、なるほど、最強の流派たる風格がある。

「ふむ、もう少し。本気を出そうかあ」

「本気を出していなかったのか？」

「ああ、お前みたいなのと本気で殺しあつたら理性がぶちぎれるかも知れないんで」

そういつて構えを取る剣上院。

その構えた瞬間、剣上院の姿は掻き消えた。

気配を感じた方向を向きクロウ・クロウで斬り付けようとする。

「剣上院流、煉極」

だが、私の視界は地面と空が逆になっていた。  
吹き飛ばされたと感じたのはその数秒後だった。

「ぐっ、気は使えない筈なのだが？」

今の衝撃で肋骨が折れてしまったようだ。内臓も多少ダメージを受けているかもしれない。

「気は使ってないよ。体術の範囲内だよ」

「フッフ、やはり面白い。だがそれでも、圧倒的有利は変わらない」

私は手のひらをむけながらそう言う。

「私の能力は血だ。つまりは私にはこんな事もできるのだよ」

奴の足元には無数の試験管。中に入っているのはもちろん血。

「爆ぜろ、オウルズ・アイボウル」

周りの空間を崩すかのような轟音が響いた……

side 不知火

「あ、あ、あああ、ぐう……」

や、べえ、油断した……

頭がいてえ、前も霞んでみえらあ。  
うぜえ、なんだ？この耳鳴り。  
うるせえよ、少し黙れよ。

『耳障りなんだよ、その音』

・・・なんだ、今の声。

ノイズが、段々と声になって行く。

意味わかんねえ。

『俺が何したって言うんだ！！』

そうそう、俺もそれ言いたい気分だ。

『もう諦めろよ』

いやいや、負けらんないでしょ。諦めちゃ駄目なんだよ。  
・・・いや、そもそも、何なんだあ？この声は

『前を見るのは辛いんだよ』

辛いけど見なくちゃなんねえだろ？

『・・・テメエは、わかってねえ』

そりゃそうだ。お前誰だよ。

『そこじゃねえよ。お前が解ってねえのはそこじゃねえ』

俺はお前を知っている？

『そう、そしてこの言葉を知っている』

あ・・・

『全部敵になるんだったら』

あ、ああ・・・

『それでもいい』

やめろ・・・

『俺は　　を守る。それだけだ、か・・・お前は、守れたのか？』

俺は、俺、は・・・あ、あ、ああああああああああああああああ！！！！

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

side 星

「驚いた、まだ生きて・・・」

しかし、その言葉を飲み込むような出来事が、目の前で起こっていた。

奴の方の鎖が、朽ちてきている。

ただの鎖だったなら、まだ理解できた。だが、これは自分の血や、他にも色々な素材で作られた最高にして最強の魔法具だ。壊れることなどありえない。

なのに、目の前で起こっている現象はどうだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、当の本人はまったく動こうとしない。

何が起こっている？

確かめるか。

「ネーミングセンスは大嫌いなんだがな。ガンタガン」

私の掌から血の弾丸が発射される。

その瞬間、剣上院はまた、消えた……

今度は気配も感じ取れない、いくら見回しても姿が確認できない。見れば鎖は今度こそ完全に千切れている。

「どこに……」

その声は続くことは無かった、後ろから蹴り飛ばされたのだ。

その感覚に気づくのは宙を待っている途中、肺から空気が押し出される。

何とか体勢を立て直し、着地し身構えようとする。

しかし、顔を手で掴まれていた。

「早い……」

一息に私の頭を鷲掴みにしながら地面に叩きつけ、それを蹴り上げる。

10m、いや20mか？どちらにせよ人間の脚力ではありえない高さには飛ばされる。

近づく地面、しかし地面には届かない。

落ちる前に、またもや蹴り飛ばされる。

物凄い速さで飛んで行っている事が自分で知覚できる。

それを追うようにしてこちらに向かってくる剣上院。

右手を振り上げ無造作に振りぬく。

背後の壁に叩きつけられた、そして『剣上院が投げた剣』が私の体に突き刺さる。

「く、かふっ……フフ、フ、速い。ま、まったく、追いつけない。フフフ」

「……」

見れば剣上院は立っているのが不思議なぐらいの怪我をしている。

皮膚ははがれ、左腕はありえない方向へ曲がっていて、おそらく血が目に入り視界も安定していないであろう頭の傷。

しかし、それを感じさない、冷め切った目。

怖くて、恐くて、こわくて、コワイ。

ずっと求めてきた、この、恐怖。

自分の人生え最も求めてきた感情。

普通の家で生まれ、恐れを知らずに生きてきた私の、終点。

「ゲホツ、フッフ、剣上院。主とは、長い付き合いになりそうだし」  
そこで、私の意識は途切れた。

side 不知火

なにしてたんだ、俺は……

俺、気を使わなくてもこんな動きできたっけ？

『く、かふつ……フフ、フ、速い。ま、ったく、追いつけない。  
フッフ』

ガラス越しに聞こえるような声でそんな事を言っている。

真っ白ちゃんからは血がたくさん出ている、恐らく致死量だろう。

……なんか、いやに冷静だな。俺

『ゲホツ、フッフ、剣上院。主とは、長い付き合いになりそうだし』

今死ぬ奴がなにを言っているんだ。

剣を引き抜く、すると星は地面に落ちた。

それだけで悟った。

……俺は、人を殺した。

気が使える様になっているのに気がついて傷口を治そうとするが、  
なかなかうまく行かない。

30分程立ってやっと7割がた治った。

そして、剣を握っていた手を見つめる。

「・・・くそつたれ」

無表情に、無感情に、無意識に、そんな言葉がこぼれた。

酷く、この手が、汚れているような気がして・・・

そして、目の前で涙をこぼしている少女にその姿を見られたのが、  
無性に苦しくて・・・

**最強は揺るがない（後書き）**

この話は意外と重要な話ですね。

まあ、あと10話位は意味を持ちそうにありませんが・・・

## 最強の憂鬱（前書き）

遅くなつてすみません。  
更新です。

## 最強の憂鬱

side 不知火

「……………刹那」

「なに？ シロ君……………」

「なぜそんなにくっついてるんだ？ 動きづらい……………」

右手を硬く握ってこちらに体を預けている刹那。

「だってシロ君が居なくなるから！！」

「ネギ少年に伝言頼んだし俺が負ける筈無いんだから安心して待ってりゃ良いんだよ！！」

「そんなこと言ってボロボロになっとったんはどこの誰や！！」

「あんな傷1時間くらいほっときゃ直るからええやろ！！」

痴話喧嘩？ なにそれ美味しいの？

「大体何時もいつもシロ君は無茶ばっかして！ 聞いたで！？ 去年京都に立ち寄ったときも無茶したって！！」

「アレはしょうがなかったんや！ 神話級の化け物妖怪が相手だったんだからよお！

死んでなかったら結果オーライなんや！！」

「そない強い奴相手にするんだったら長とかシロ君のお父さんたちに連絡すればよかったやん！」

「まだ修行が終わってなかったのにそうやすやすと頼れんやろが！アレは試練だったんや！」

「それでも無茶したらあかんっていつとるんや!!!!」

でも、まあこんだけ突っかかってきてくれた方が色々と気持ちも晴れるってもんか。

side out

・  
・  
・  
・

sideネギ

「ネギ・・・アレ止めなさいよ」

「無理です。アスナさんこそ止めてください」

「・・・朝倉。昨日の責任をチャラにしてあげるから止めてきなさいよ」

「・・・祭崎先生。大人なんだから止めてください」

「俺はまだ成人ではない。それにあの喧嘩を止めるには命が何個か必要になりそうだ」

「「確かに」」

「まあ、ほっといても大丈夫だろう。それよりネギ君。これをどうするかだろう?」

「うっ!?!」

そうだった。昨日の・・・

「そうよ! どーすんのよネギ! こーんなにカード作っちゃって!?!」

「えうっ!?!? 僕ですか!?!」

「まあまあ、アスナ。もーかったてことで良いじゃない」

「そんな単純な世界じゃないがな。宮崎には極力ばれない様にしろよ?」

下手したら俺とネギ君揃ってオコジョ刑だ」

「ひう!?!」

そそそっそうだった。本国強制帰還なんてこと・・・

「あわわわ！ どうすれば・・・」

side 不知火

何とか刹那の怒りを静めた俺はネギ少年を安心させてやるうと声をかける。

「大丈夫だ少年」

「し、不知火さん・・・」

「オコジヨでもネギ少年はネギ少年だ！」

「うわああああああん!？」

「おっと、苛めすぎたか・・・むっ!？」

前方から3本、後ろから5本・・・  
焦らずにそれを掴む。

「・・・クナイ？」

「「隙あり!」「」

「まだまだ!」

左右から飛び掛ってくる影の手を掴みその場に叩き伏せる。

「はあ、時と場合を選ばんか貴様らは・・・時に、楓嬢ちゃんよ。なぜにお前さんまで飛び掛ってきた？」

「拙者も目標を立てたほうが強くなれると踏んだでござるよ」

「ふむ、まあ目標立てるのは良いが俺はそんなに褒められたもんじやないから・・・って、またか!？」

前方から飛んできた銃弾を避ける。

「隙あ・・・」

「だからない言ってるやろ!」

後ろから迫ってきた奴を背負い投げにする。  
・・・あ、つい素に戻った。

「龍宮嬢ちゃんよ・・・お前さんまで何ぞや・・・」

「ふむ、ここはノリに乗って置いた方が良いと思ってね」

皆が目を丸くしているじゃないか・・・

「まあいいや、おいコタ。今日は少年が本家に行くそうだから護衛頼むぞ？」

俺は刹那の許可が出るまで戦闘できなくなったから・・・」

「当然です」

「し、しかし桜咲! 今は少しでも戦力が・・・」

「何ですか？」

「い、いや、だから今は少しでも戦」 「何でしょうか・・・私の耳がおかしくなったんでしょか？ それともその口に詰め物でもすればこの幻聴は止まるんでしょか？」 ・・・・いや、悪かった」  
「バカだな」。ああなっちゃったら刹那は誰にも止められないのに・・・  
・  
そう心の中で思っていると副担が俺に手招きしてくる。

「なんだ？」

「如何にかして説得できないんですか？ それかこつそりと戦闘するとか・・・」

「無理だな。これを見る」

そう言って右手を見せる。

その手首には黒い紋章が浮かんでいる。

「・・・これは？」

「刹那がさつき手握ってただろ？ その時に付けられた・・・  
こつという術ばかり巧くなりやがってよお。まったく気づかなかつた」

これは剣上院流の術式で気とかを封印する物なんだが、たぶん母ちゃんあたりが仕込んだんだろうけど・・・  
まあ、剣上院の術だからもちろん解き方もある程度は・・・

あ、ある程度は……

……と、解けない……だと……

これ絶対なんか改造してあるな。

まったく解けない。

まあ、気を使わんでもあの白髪以外だったら行けそうな気がするけど。

「ま、諦めてくれ、そしてがんばれ副担任先生よ。

で、龍宮嬢ちゃん、楓嬢ちゃん。もしかしたら応援頼むかもしれないからよろしく頼むぜ？

これ、電話番号とメルアド」

「あい解ったでござる」

「ふむ、思わぬ所で連絡先をゲットしてしまった。一日5000件のメールは覚悟しておくんだね」

「貴様はストーカーか……まあ良い。ボチボチ他の奴らも動き出すだろ。」

俺はとりあえず刹那たちに付いていく。ネギ少年、無茶するんじゃないぞ？

困った時は……ん？なんかアホっぽい三人組を探せ。大抵のことは何とかなる」

「へ？ あ、はい……」

この時ネギは不知火の言う三人組におおいに助けられるのはまた後



「あ、アスナさんがハルナさんに見つかってしまったようで・・・」

「はあ、まあ別に良いか」

街の中には剣上院家縁の奴が出歩いてるだろうからな。

一般人を巻き込むこたあねえだろ・・・

まあたまにはゆっくり観光つてのも良いか。

sideネギ

「不知火さん、帰ってたんですね！ おいテメエら挨拶しろや！」

「いや、良いからそう言うの。回り怖がるから、マジで」

一件ヤクザと見紛う程の強面の集団から頭を下げられている不知火さん。

相坂さよさんのお義兄さんで、クラスの中でも絡みにくい人たちとの関係を持っている人です。

アスナさん、このかさん、刹那さんとも知り合いらしく、すっごく強い人です。

ただし正体が解らないというか・・・

「・・・ねえ、桜咲さん。不知火さんってその筋の家系の人だったりするの?」

「いえ、シロ君は剣上院流という由緒正しい剣術道場の一人息子で

す

剣・・・確かにこのかさんを攫おうとした人たちを倒す時に使っていたな・・・

「ところで不知火さんちよつとお話が・・・」

「え？ ああ、刹那チヨツト外すから先に行つててくれ。少年、がんばれよ」

「え、あ、はい！」

でも悪い人じゃないよね。

side 不知火

「で、何だよ。俺はあいつら護衛しなくちゃならないんだが？」

「いえ、ただですね」

「なんだよ・・・っ!？」

会話の途中で急に回りにいた門下生の影がぶれ始め石の槍が飛んできた。

「・・・幻覚か」

「今を避けられるとは思っていなかったよ」

目の前に居るのは一昨日の白髪の少年・・・

「こんな手段で攻めてくるとはな・・・」

「君が人員を一人減らしてくれたおかげでね。それに君をここで倒さないと後々面倒だ」

「へっ、剣上院に敗北の二文字は許されねえんだぜ？」

とは、言ってみたものの。

キツツイな、これは・・・

「全快の状態だったら解らないけど、気を使えない今の君じゃ僕には勝てないよ」

そう言いつつ数個の岩を出現させこちらに向けて撃ってくる。

ここは狭い路地だ。後ろは行き止まり、前は塞がれている。

「上しかねえ・・・」

全力をこめてジャンプするもの・・・

「当然上から攻撃が来るよな・・・」

「『冥府の石柱』」

「剣上院流体術奥義・碎城拳波」



「剣の上に立つ流派に剣で来るとはいい度胸！ 来い、夕凧！ 奥義、千本零閃」

この際少しの怪我はしょうがない。致命傷の剣だけでも壊す！  
左右右下左上後ろ左斜め前右斜め後ろ左上下……

「ぐっ！？」

「アレで左手だけか。凄まじいね」

こいつ、手え抜いてやがるな。屈辱だ。

だが、ここで本気を出されても流石に勝つのは無理だ。  
封呪はまだ解けない……

「でも、これで終わりだよ。『万象貫く黒杭の円環』」

「げえ……」

仕方がない、『使うか』？

「我が骨子は捻じれ狂う… カラドボルグ！」

「む……」

爆音を立てながら竜巻のように過ぎ去っていくのは……矢？  
いや剣か？

「だから封印は早計過ぎるといったんだ」

「あんたか副担。一応礼は言っというてやるよ」

「祭崎だ」

「ありがとよ祭崎くん」

あの白髪、さっきのにまぎれて逃げやがったか・・・

「・・・逃げたな」

「ああ、ったくアブねーアブねー冷や冷やしまくったぜ」

「こっちはアレで死なないあんたの異常性に冷や冷やしてるよ・・・」

この野郎途中観戦してやがったな？  
それにしても・・・

「さっきの奴、覚えがある気配だったな。なんだったつけ・・・」

「どうした。早く行かないと桜咲に起こられるぞ。ただでさえ服がボロボロなんだ。」

きつと狂乱するぞ？」

「うへえ・・・」

このままにげちゃおうっかな・・・

そんな訳にも行かずなぜ早く逃げなかったのかと怒られる俺であつた・・・

## 最強の憂鬱（後書き）

祭崎の能力。

定番中の定番、Fateの投影魔術でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5960r/>

---

最強の武人に祝福を

2011年12月29日09時45分発行